

林 行夫(はやし ゆきお)

京都大学地域研究統合情報センター長、教授。専門地域はタイ、ラオスを主とする大陸部東南アジア。研究関心は同地域の上座仏教徒の宗教と社会の動態。なぜ、どのように人はこの世ならぬ世界と関わって地域を築くか。1981年よりタイ、90年代以降ラオス、カンボジア、中国雲南省を含めて実践宗教、民族間関係の地域間比較研究を行い、2006年から同地域の寺院施設と出家者の移動に関する時空間マッピングに従事。



柳澤 雅之(やなぎさわ まさゆき)

京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門は農学、農業生態学、ベトナム地域研究。主な研究対象地域はベトナムやインドネシアを中心とする東南アジア全域で、稀にアフリカやアマゾンの森を比較研究のために訪問する。研究関心事は、東南アジアの森林面積が急激に減少する中で、地域ごとに異なる土地利用の変化のメカニズムを統一的に理解することや、人為的につくりだされた植生の生態学的価値の評価とその利用について。



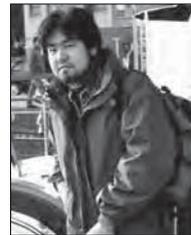
山本 博之(やまもと ひろゆき)

京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はマレーシア地域研究／現代政治史、災害対応と情報、地域研究方法論。博士(学術)(東京大学、2003年)。2003～2004年に在インドネシア・メダン日本国総領事館の委嘱調査員を務めた。科研費プロジェクト基盤(A)「災害対応の地域研究の創出：『防災スマトラ・モデル』の構築とその実践的活用」(2011～2014年度)の研究代表者。



寺田 匡宏(てらだ まさひろ)

京都大学地域研究統合情報センター共同研究員。1971年生まれ。歴史学研究者。災害史や博物館における歴史展示のあり方を研究。これまでに企画した展示として、国立歴史民俗博物館「ドキュメント災害史」展(2003年)、[記憶・歴史・表現]フォーラム「いつかの、だれかに」展(2005年)、歴史伝承委員会「土・くらし・空港」展(2006年)ほか。共編著に『訪ねてみよう戦争を学ぶミュージアム／メモリアル』(岩波ジュニア新書、2006年)、『記憶表現論』(昭和堂、2009年)など。



浜元 聡子(はまもと さとこ)

京都大学東南アジア研究所研究員。専門は東南アジア地域研究、文化人類学。1992年、立命館大学国際関係学部を卒業。2004年、京都大学で博士号(人間・環境学)取得。



原 正一郎(はら しょういちろう)

京都大学地域研究統合情報センター教授。地域情報学(Area Informatics)の創成と資源共有化システムの構築を目指した研究を進めている。特定の地域について異なる視点やテーマから得られた情報を総合的に研究したり、同一テーマについて地域間で比較研究したりする研究を支援する情報モデルやシステムの開発を目指している。近年は、地理情報システムの開発、地名辞書などのシステム構築を行っている。東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。学術情報センター助手、国文学研究資料館助教授を経て、2006年8月から現職。



西 芳実(にし よしみ)

京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はインドネシア地域研究、多言語・多宗教地域の災害・紛争対応過程。博士(学術)(東京大学、2007年)。1997~2000年にインドネシア・アチェ州のシアクアラ大学教育学部歴史学科に留学。東京大学大学院「人間の安全保障」プログラム助教等を経て2011年より現職。災害や紛争がもたらす記憶や経験の断絶を繋ぎなおす試みとして、アチェで「タイプライターで書く自分史」プロジェクトに取り組んでいる。



服部 美奈(はっとり みな)

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授。愛知県生まれ。専門分野は比較教育学・教育人類学。研究テーマはインドネシア・西スマトラにおけるイスラーム教育の歴史的展開、インドネシアの教育改革、ジェンダーと教育など。名古屋大学教育学部卒業。博士(教育学、1999年)。岐阜聖徳学園大学助教授を経て2004年10月より現職。著書に『インドネシアの近代女子教育——イスラーム改革運動のなかの女性』(勁草書房、2001年)、『変貌するインドネシア・イスラーム教育』(共編著、東洋大学アジア文化研究所、2007年)、『途上国における基礎教育支援(下)国際的なアプローチと実践』(共著、学文堂、2008年)などがある。



星川 圭介(ほしかわ けいすけ)

京都大学地域研究統合情報センター助教。専門とする地域はタイ、インドネシアを中心とする東南アジア地域。地域の人々がどのように各地の自然環境に適応し、暮らしを営んできたか、社会・経済状況等の変化によって生き方をどのように変えて来たかをテーマとして研究を行っている。主な研究対象は農村部での生業変化だが、災害によってもたらされた新たな状況に人々が適応していく過程として災害復興過程にも関心をもっている。



ジュリアン・ブルドン・ミヤモト

京都大学地域研究統合情報センター教務補佐員。京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻社会情報ネットワーク講座博士課程(広域情報ネットワーク分野)。主に異文化コラボレーションと多言語ウェブサイトにおけるローカライゼーションパターンに関する研究を行う。Université de Caen Basse-Normandie情報科学科卒業、Université de Saint-Etienne修士号取得(ウェブインテリジェンス)。University of Sheffield情報学研究科に留学。2011年より地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクトのシステム開発を担当。



亀山 恵理子(かめやま えりこ)

奈良県立大学地域創造学部講師。1972年生まれ。専門は東ティモール、インドネシアをフィールドとした社会開発研究。学部時代にインドネシア語を学び、その後援助機関のスタッフとして東ティモールとインドネシアのアチェで紛争後・災害後の復興支援活動にたずさわる。言語文化学修士(大阪外国語大学、1998年)、開発学修士(Institute of Social Studies、2006年)。



牧 紀男(まきのりお)

京都大学防災研究所巨大災害研究センター准教授。1968年京都市生まれ。1991年京都大学工学部建築学科卒業。1997年に京都大学大学院工学研究科で博士(工学)を取得。京都大学大学院工学研究科助手などを経て2005年より現職。専門は、防災計画、災害復興計画、危機管理システム、すまいの災害誌。著書に『災害の住宅誌』(鹿島出版会、2011年)、『組織の危機管理入門—リスクにどう立ち向えばいいのか』(京大人気講義シリーズ、丸善、2008年)、『はじめて学ぶ都市計画』(市ヶ谷出版、2008年)などがある。



学術交流協定の締結

京都大学地域研究統合情報センター (CIAS) は、本国際シンポジウム／ワークショップ期間中の2011年12月24日に、インドネシアの国立シアクアラ大学津波防災研究センター (TDMRC) と研究交流および協力の基本協定を締結した。CIASから林行夫センター長、原正一郎副センター長、西芳実准教授、柳澤雅之准教授、山本博之准教授、星川圭介助教、ジュリアン・ブルドン研究員がインドネシア共和国アチェ州バンダアチェ市を訪問し、協定文書に調印した。

この協定の締結により、日本とインドネシアにおける地域情報学分野の研究者の協力を拡充し、人的交流と情報の共有手段を提供し、若手研究者の招へいと派遣についても努力することが合意された。

アチェ州は、2004年12月のインド洋津波により死者・行方不明者16万5000人の被害を受け、現在も復興の途上にある。地域にねざした復興を進め、その経験を世界のほかの地域に意味のあるかたちで伝えるために、地域研究と地域情報学の方法が求められている。

調印式の後、研究協力協定締結記念ラウンド・テーブルを開催し、ムハンマド・ディルハムシャー TDMRC センター長、リダTDMRC 副センター長らと研究協力について意見交換を行い、相互理解を深めた。



研究協力のあり方をめぐって
討議したラウンド・テーブル



協定に調印した林行夫地域研究統合情報
センター長(右)とムハンマド・ディルハム
シャー津波防災研究センター長(左)



ラウンド・テーブルには、双方の機関から各7名が参加

現地報道記事の紹介

シンポジウム／ワークショップの様子は現地の複数メディアで報道された。

●じゃかるた新聞 2011年12月27日

JSTIJICA、京大など

震災の経験、世界に発信 アチエで7周年シンポ

スマートラ沖地震・津波が構（JST）と国際協力機構（JICA）が連携した地球規模課題対応国際科学技術協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」の一環で、京都大・地域研究統合情報センター、アチエのシヤークアラ大・津波防災研究センターが協力し、二十一日から二十六日まで、アチエ州パシダアチエ市で国際シンポジウム・ワークショップ「災害遺産と創造的復興―地域情報学の知見を活用して―」を開催した。

JSTIJICA協力事業で「地域文化に即した防災・復興概念」の研究を担当してきた京大の山本博之教授のグループなどを中心に行われ、インドネシア側と研究成果を共有することを目指す。州政府や研究者、地元小中学校の教員ら毎日約百人が参加した。主に、同事業と京大が開発してきた「災害地域情報マッピング・システム」の活用方法などについて議論した。

自然災害やその他の事件・事故などの記事が地図上に記録され、その場所では何が起きたかを時系列で把握することができると同システムは、震災発生後の支援時に地元政府や諸外国の援助団体が即座にその地域に関する情報を共有できることを目的に開発された。

被災地の姿容が分かることで、津波被害の跡地を観光開発につなげようとしているアチエの取り組みに生かすこともできる。

二十一日のシンポジウムであいさつしたアチエ州のイルワンディ・ユスフ知事は「災害の情報を世界と共有するシステムを考えたいかなければならない」と述べ、マッピング・システムを評価。「東日本大震災で被災した日本とともに、被災と復興の情報を共有、整理して世界に発信していきたい」と語った。

シンポジウムに参加した京大の西芳実・准教授は「東日本大震災後、アチエの人々は『自分たちの経験を生かしてほしい』『同じ経験をしたい』という思いが強い」と語り、マッピング・システムは「アチエの経験を世界に開く懸け橋になる」と強調した。

●Serambi Indonesia 2011年12月27日



SERAMBI/BUDI PATRIA

PARA peserta Simposium Internasional dan Workshop tentang Warisan Bencana serta Upaya Ekonomi Kreatif dari Jepang, berkunjung ke News-room Harian Serambi Indonesia, Minggu (25/12) sore. Delegasi itu dipimpin Dr Hiroyuki Yamamoto dari Kyoto University, disambut Redpel Serambi, Yarmen Dinamika.

Tsunami Mobile Museum Oleh-oleh Jepang untuk Aceh

Cara Aceh membangkitkan diri pascatsunami telah menjadi contoh baik bagi Jepang. Negeri Sakura itu pun memberi oleh-oleh untuk Aceh berupa Tsunami Mobile Museum, selain menanam bunga kertas.

Oleh **Hendra Syahputra**

Gempa tektonik dan gelombang tsunami menyapu sebagian Aceh pada 26 Desember 2004. Ratusan ribu jiwa melayang. Jepang, mengalami hal serupa dengan Aceh pada 11 Maret 2011. Belasan ribu jiwa melayang.

Seperti juga Aceh, masyarakat Jepang pun pernah menghadapi masa sulit. Terlebih dalam upaya rekonstruksi dan rehabilitasi pascabencana alam itu. Kerja keras harus tetap dilakukan, karena hidup harus terus berlanjut.

Sepenggal kalimat itu membuka percakapan saya dengan Prof dr Hayashi Yukio, Direktur Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University, Jepang.

Hayashi tak sendiri. Turut bersamanya menemani saya berdiskusi: Prof dr Yanagisawa Masayuki (ahli bidang pertanian dan agraria), Prof dr Yamamoto Hiroyuki, Prof dr Hara Shoichiro (ahli bidang area informatics), dan Prof dr Nishi Yoshimi (ahli bidang penanggulangan sosial terhadap bencana alam dan konflik).

Hayashi mengatakan, pengalaman masyarakat Aceh yang telah berusaha

dalam upaya rehabilitasi dan rekonstruksi (rehab-rekon) pascabencana alam 26 Desember 2004 sangat membekas di benak masyarakat Jepang.

"Bencana adalah kejadian yang tragis, namun bencana membuka hubungan baru antara kedua masyarakat yang terlanda bencana alam terdahulunya, yaitu masyarakat Indonesia (khususnya masyarakat Aceh) dan masyarakat Jepang," ujar Hayashi.

Para profesor dari Jepang itu pun berhasrat memperkuat hubungan kerjasama Aceh-Jepang lebih lanjut. Mereka tak ingin membiarkan hubungan yang telah terjalin itu terbelengkal begitu saja.

Caranya, mereka berinisiatif mengumpulkan pengalaman Aceh membangkitkan diri pascatsunami 2004 dalam data dan informasi. Pendokumentasian itu diberi nama Aceh Digital Museum atau Tsunami Mobile Museum.

Dalam melakukannya, Hayashi dibantu Yamamoto dan Nishi. Mereka kemudian mengumpulkan semua arsip dan data tentang bencana Aceh. Semua pengalaman masing-masing negara



Anak-anak korban tsunami di Kecamatan Lingsa, Kabupaten Aceh Besar, Senin (26/12), menanam bunga masa depan (Shizui Mirai no Hanadan) yang dikirim masyarakat Kobe, Jepang di Lapangan Pantai Lempuk, Kecamatan Lingsa, Aceh Besar saat peringatan tujuh tahun tsunami Aceh.

(Aceh dan Jepang) dalam upaya mengatasi dampak bencana tersebut yang mereka temukan dikumpulkan dan disatukan. Pengalaman kedua negara itu nantinya bisa dimanfaatkan masyarakat negara lain yang menghadapi bencana alam di masa mendatang.

Yamamoto dan Nishi mulai mencari

bahan pada masa rehab-rekon. Menurut mereka, masyarakat yang hidup pascabencana di tengah pelaksanaan rehab-rekon sangat kooperatif (mau bekerjasama). Hal itu membantu Yamamoto dan Nishi dalam mengumpulkan dan meninjau berbagai informasi baru untuk membangun komunitas sosial baru.

Mereka paham, saat proses rehab-rekon sedang berjalan, ada banyak informasi yang tak sempat disusun dan disimpan secara teratur oleh masyarakat korban bencana. Bahkan ada informasi penting yang dibiarkan begitu saja. Nah, keduanya memanfaatkan informasi-informasi demikian untuk melengkapi data-data yang dibutuhkan dalam pembuatan Tsunami Mobile Museum.

Usai meraup bahan, Yamamoto dan rekannya berencana melakukan symposium dan workshop untuk mengenalkan konsep yang sedang dikembangkan, yaitu Aceh Digital Museum. Dalam menyusun Aceh Digital Museum itu, mereka melakukan kajian area informatics, yaitu ilmu pengetahuan aplikasi informasi berdasarkan hasil pengetahuan.

"Area studies dapat digunakan sebagai alat yang menyusun dan menyimpan informasi dengan cara terbuka pada umum, agar informasi tersebut bisa dimanfaatkan untuk meningkatkan kehidupan masyarakat," ujar Yamamoto.

Area studies merupakan suatu ilmu pengetahuan untuk mengaplikasikan kearifan hasil kajian akademis sesuai dengan keadaan dan kebutuhan masyarakat masing-masing wilayah.

Dengan area studies, hasil kajian politik, ekonomi, agraria, mitigasi bencana, dan lain lain akan dapat dimanfaatkan sesuai dengan keadaan dan kebutuhan lokal dengan cara lebih tepat.

Area studies itu merupakan suatu metodologi yang dapat memudahkan tukar-menukar informasi dari jenis yang berbeda dengan menggunakan komputer dan teknologi informasi seperti, sistem database, satelit, analisa multilinguistik, dan lain lainnya seperti gambar foto, manuskrip, dokumen-dokumen, buku, catatan tangan yang dapat ditempatkan di atas peta virtual yang ditetapkan di spasi layar komputer.

Peta virtual menjadi suatu platform yang menghubungkan berbagai infor-

masi dan memberi suatu gambaran masyarakat lokal dengan kearifan lokal. Sistem pemetaan itu bisa memanfaatkan berbagai informasi sesuai dengan tujuan masing-masing, misalnya bidang pariwisata bencana, edutainment, dan kajian sejarah.

Beberapa waktu lalu, Yamamoto, Nishi, dan teman-temannya kemudian menggelar symposium (workshop) internasional di Banda Aceh selama 22-26 Desember 2011. Workshop itu untuk mempertimbangkan bagaimana konsep Tsunami Mobile Museum dapat diimplementasikan di Banda Aceh, dalam rangka refleksi tujuh tahun tsunami Aceh.

Area informatics dalam bentuk Tsunami Mobile Museum, menurut Yamamoto, tak berfungsi kalau tak ada niat dan minat masyarakat. Perlu juga kerjasama antara berbagai lembaga dan pihak yang bertanggungjawab sesuai dengan tujuannya.

"Kalau sudah berhasil menciptakan kerjasama tersebut, kita yakin bahwa dengan area informatics ini Indonesia, khususnya Aceh, akan menjadi suatu daerah modal untuk mengembangkan perekonomian kreatif pascabencana alam, terlebih dengan negara-negara lain di dunia," kata Yamamoto.

Mungkin saja Indonesia menjadi teladan penanggulangan bencana alam secara kreatif bagi negara-negara lain termasuk Jepang yang sedang menjalankan proses rehab-rekon.

Dalam workshop tersebut, mereka mengajak semua peserta mengumpulkan masing-masing pengetahuan, pengalaman, informasi, dan misti sendiri untuk memberi sumbangsih pengetahuan bagi siapa saja.

"Kami dari Kyoto University, Jepang, mengharapkan symposium/workshop ini akan menjadi suatu penolong untuk membuka halaman baru untuk hubungan antara masyarakat Indonesia (Aceh) dengan masyarakat Jepang dalam bidang area informatics," kata Yamamoto.

"Ini sedikit oleh-oleh dari kami untuk masyarakat Aceh," sambung Yamamoto sembari memperlihatkan alamat Tsunami Mobile Museum: disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh.J.

Di situs itu, terdapat database lengkap mengenai gempa dan tsunami Sumatera 26 Desember 2004. Ia mulai beroperasi 5 Oktober 2009. ■

●記事タイトル

津波モバイル博物館
日本からアチェへの贈り物

●記事リード

津波からの復興を遂げたアチェの経験は日本にとってよい参照すべき例となる。そして日本も津波モバイル博物館という贈り物をアチェに提供してくれた。

Sambutan
International Symposium/Workshop
Disaster Heritage and Creative Economy:
From Perspective of Area Informatic

Pada 11 Maret 2011, Jepang telah dilanda oleh gempa bumi dan tsunami besar yang menimbulkan korban jiwa lebih dari 19 ribu orang. Masyarakat Jepang menghadapi masa yang sukar dan susah dalam upaya rekonstruksi dan rehabilitasi dari gempa dan tsunami selama bertahun-tahun yang akan datang. Dengan hal ini, kami masyarakat Jepang teringat pada pengalaman masyarakat Aceh yang telah berusaha dalam upaya rekonstruksi dan rehabilitasi dari bencana alam yang melanda tanah rencong pada 26 Desember 2004.

Bencana adalah kejadian yang tragis, namun bencana membuka hubungan baru antara kedua masyarakat yang terlanda bencana alam terdasyat yaitu masyarakat Indonesia (khususnya masyarakat Aceh) dan masyarakat Jepang. Dalam rangka memperkuat hubungan ini lebih lanjut, jangan dibiarkan saja tetapi perlu dikumpulkan dan dipersatukan pengalaman masing-masing dalam upaya mengatasi akibat bencana tersebut sehingga pengalaman ini dapat dimanfaatkan oleh masyarakat negara lain yang akan menghadapi bencana alam pada masa yang akan datang.

Bencana tidak hanya menimbulkan dampak fisik saja tetapi juga mengakibatkan kehilangan berbagai informasi. Tidak hanya kehilangan dokumen, buku, foto yaitu sarana penyimpanan informasi tetapi juga keluarga, kawan-kawan dan pemandangan daerah yang merupakan sumber pokok memori dan kenang-kenangan kita.

Masyarakat yang berada di tengah rehabilitasi dan rekonstruksi dari bencana alam kembali mengumpulkan dan meninjau kembali berbagai informasi baru untuk membangun komunitas sosial baru. Pada saat proses rekonstruksi dan rehabilitasi sedang berjalan, terdapat informasi terlalu banyak sehingga kita tidak sempat member perhatian untuk menyusun dan menyimpan informasi tersebut secara teratur dan membiarkan informasi berlalu begitu saja. Informasi yang disimpan secara tidak teratur atau secara tidak dikaitkan dengan masyarakat, tetapi tidak dapat dimanfaatkan orang lain walau informasi mentah tersebut berharga.

Dengan kesempatan symposium dan workshop ini, kami ingin menyarankan ilmu “*Area Informatics*” yaitu ilmu pengetahuan aplikasi informasi berdasarkan hasil pengetahuan “*Area Studies*” sebagai alat yang menyusun dan menyimpan informasi dengan cara terbuka pada umum supaya informasi tersebut boleh dimanfaatkan untuk meningkatkan kehidupan masyarakat.

Area Studies merupakan suatu ilmu pengetahuan untuk mengaplikasi kearifan hasil kajian akademis sesuai dengan keadaan dan kebutuhan masyarakat masing-masing wilayah. Dengan *Area Studies*, hasil kajian politik, ekonomi, agraria, mitigasi bencana dan lain lain akan dapat dimanfaatkan sesuai dengan keadaan dan kebutuhan lokal dengan cara yang lebih tepat.

Area informatics merupakan suatu metodologi yang memudahkan tukar-menukar informasi yang berlainan jenis dengan menggunakan komputer dan teknologi informasi seperti GIS, sistem database, satelite imeji, analisa multilinguistik dan lain lain. Misalnya gambar foto, manuskrip, dokumen-dokumen, buku, catatan tangan ditempatkan diatas peta virtual yang ditetapkan di spasi layar komputer. Peta virtual menjadi suatu platform yang menghubungkan berbagai informasi dan

memberi suatu gambaran masyarakat lokal dengan kearifan lokal. Dengan menggunakan sistem pemetaan ini dapat kita manfaatkan info-info yang berbeda bentuk sesuai dengan tujuan masing-masing, misalnya bidang pariwisata bencana, *edutainment*, kajian sejarah dan lain lain. Simposium/Workshop ini bertujuan mempertimbangkan bagaimana konsep Tsunami Mobile Museum dapat diindahkan dan diimplementasikan di Banda Aceh, di mana tempat yang sedang menyambut tahun Pariwisata pada tahun ini. Juga dapat dimanfaatkan untuk peringatan dini sosial yang menunjukkan dimana daerah yang sedang menghadapi permasalahan sosial.

Area Informatics tidak berfungsi kalau tidak ada niat dari masyarakat sendiri. Perlu juga kerjasama antara berbagai lembaga dan pihak yang bertanggung jawab sesuai dengan tujuannya. Kalau sudah berhasil menciptakan kerjasama tersebut, kita yakin bahwa dengan *Area Informatics* ini Indonesia, khususnya Aceh akan menjadi suatu daerah modal untuk mengembangkan perekonomian kreatif pasca bencana alam terlebih dahulu dari negara-negara lain di dunia. Mungkin saja Indonesia menjadi teladan penanggulangan bencana alam secara kreatif bagi negara-negara lain termasuk Jepang yang sedang menjalankan proses rekonstruksi dan rehabilitasi.

Selama 6 hari dalam symposium/workshop ini, peserta diharapkan mengumpulkan masing-masing pengetahuan, pengalaman, informasi, dan misi sendiri dan mempertimbangkan arah ke mana kita akan menuju. Kami selaku panitia pelaksana dari Kyoto University, Jepang mengharapkan kiranya symposium/workshop ini akan menjadi sesuatu yang dapat membantu untuk membuka halaman baru pada hubungan antara masyarakat Indonesia/Aceh dengan masyarakat Jepang dalam bidang *Area Informatics*.

Yang terakhir kami ingin mengucapkan terima kasih atas segala pihak yang telah bergiat menyiapkan acara selama 6 hari. Simposium/Workshop ini diselenggarakan di atas kerjasama antara Tsunami Disaster Mitigation Research Center, Syiah Kuala University dan Center for Integrated Area Studies, Kyoto University disponsori oleh JICA-JST-LIPI-Ristek Joint Research Project: Mutli-disciplinary Hazard Reduction from Earthquakes and Volcanoes in Indonesia dan JSPS Research Project: Area Studies dan Penanggulangan Bencana Alam: Model Sumatera dalam Upaya Penanggulangan Bencana.

21 Desember, 2011, Banda Aceh

Dr. YAMAMOTO Hiroyuki

Associate Professor, Center for Integrated Area Studies,
Kyoto University, Japan

Ketua Group 4-2,

Investigation of Community Based Disaster Prevention
and Restoration Based on Cultural Background,

JICA-JST-LIPI-Ristek Joint Research Project:

Mutli-disciplinary Hazard Reduction

from Earthquakes and Volcanoes in Indonesia



SAMBUTAN GUBERNUR ACEH
PADA KEGIATAN INTERNATIONAL WORKSHOP
ON DISASTER HERITAGE AND CREATIVE ECONOMY:
FROM PERSPECTIVE OF AREA INFORMATICS
TANGGAL 22-26 DESEMBER 2011

Assalamu'alaikum wr. wb.

- *Hamdan wa syukran Lillah. Salatan wa salaman 'ala Rasulillah, wa'ala alihi washahbihi wamanwalah*
- Pertama-tama marilah kita panjatkan segala puji dan syukur kehadiran Allah subhanahu wa ta'ala yang telah melimpahkan nikmat dan rahmat-Nya berupa kesehatan dan kesempatan kepada kita untuk hadir di Atjeh Museum Tsunami, Banda Aceh.
- Selawat dan salam kita persembahkan kepada junjungan kita Nabi besar Muhammad SAW, pembawa risalah kebenaran dan penuntun ummat manusia ke jalan yang di ridhai Allah SWT
- Penghormatan kepada:
 - Director of Foreign Affairs Multilateral Funding, the State Ministry of National Development Planning (Bappenas), Jakarta.
 - Dr. Hiroyuki YAMAMOTO, CIAS, Kyoto University dan seluruh rombongan yang hadir dari Kyoto University.
 - Mr. Kiyomi ENDO, JICA beserta seluruh rombongan yang hadir.
 - Prof. Dr. Jasman J Ma'ruf, Head of Department, Department of Culture and Tourism of Aceh Province.
 - Bapak Bachtiar Ishaq, Head of Department, Department of National Education of Aceh Province.
 - Prof. Yuwaldi Away, Head of Department of Transportation, Communication, Information, and Telematics of Aceh Povince.
 - Bapak Adnan Beuransyah, Parliament of Aceh (DPRA).
 - Ir. Syafri Gani, Head of AGDC, Aceh Planning and Development Agency (Bappeda Aceh).
 - Bapak Pepih Nugraha, Kompas Media Nusantara Co.Ltd., Jakarta.
 - Bapak Yarmen Dinamika, Serambi Indonesia, Banda Aceh.
 - Dr. Firdaus Daud, Head of Unit, Disaster Mitigation of South Sulawesi Province.
 - Emi Riza, ST, Head of Data and Information Centre Bappeda Aceh (PUSDATIN).
 - Dr. Muhammad Dirhamsyah, Director TDMRC Syiah Kuala University dan seluruh pengurus TDMRC.
 - Seluruh hadirin yang berbahagia.

Pertama-tama kami mengucapkan selamat datang kepada seluruh Undangan pada acara International Workshop on Disaster Heritage and Creative Economy: From Perspective of Area Informatics.

Kegiatan ini sangat penting artinya bagi Pemerintah dan Rakyat Aceh dalam upaya penanggulangan bencana alam secara kreatif bagi negara-negara lain termasuk Jepang yang sedang menjalankan proses rekonstruksi dan rehabilitasi. Karena itu, kita berharap nantinya hasil dari workshop ini dapat berguna dan dijadikan pedoman penting dalam menyusun berbagai strategi pembangunan informasi Aceh pada masa mendatang.

Para hadirin yang kami muliakan,

Bencana gempa bumi dan tsunami yang melanda Aceh pada tanggal 26 desember 2004 yang lalu dan yang melanda Jepang pada tanggal 11 Maret 2011, mengajak kita untuk bersama-sama berbagi pengalaman dalam upaya rekonstruksi dan rehabilitasi. Keadaan yang sama ini membuka hubungan

baru antara Indonesia (khususnya Aceh) dengan Jepang dan perlu diperkuat dalam upaya mengatasi akibat bencana tersebut.

Salah satu dampak yang timbul dari bencana adalah hilangnya berbagai informasi, baik itu dokumen-dokumen dalam bentuk tulisan, audio, maupun visual. Untuk itu, kegiatan rehabilitasi dan rekonstruksi semestinya juga perlu melakukan pengumpulan dan meninjau kembali berbagai informasi yang baru. Namun, sejalan dengan cepatnya proses rehabilitasi dan rekonstruksi pasca bencana, arus informasi sangat cepat dan perlu disusun dengan rapih, disimpan dan dimanfaatkan sehingga informasi tersebut menjadi sesuatu yang paling berharga.

Kegiatan workshop di bidang informasi seperti ini diharapkan dapat mengaplikasikan kearifan hasil kajian akademis sesuai dengan keadaan dan kebutuhan masyarakat, yang dapat mencakup berbagai bidang ilmu, seperti kajian politik, ekonomi, agraria, mitigasi bencana dan lain sebagainya.

Hadirin yang kami muliakan,

Pemerintah Aceh sangat berbahagia, di tengah berbagai kegalauan menghadapi bencana, di Aceh kita memiliki TDMRC sebagai “partner setia” pemerintah yang sering disebut “think-thank” pemerintah di bidang kebencanaan. Bagi pemerintah Aceh peranan TDMRC sangat penting dalam pembangunan sumberdaya manusia Aceh yang handal dan mampu berkiprah dalam memecahkan berbagai masalah pembangunan bangsa di bidang kebencanaan dan dapat menyumbangkan ilmu pengetahuan dan teknologi ke tempat lain.

Sesuai dengan tujuan workshop ini yaitu untuk mempertimbangkan bagaimana konsep Tsunami Mobile Museum dapat dijadikan suatu keharusan dan diimplementasikan di Banda Aceh menurut hemat kami adalah sangat sesuai dengan menyambut tahun Pariwisata pada tahun ini.

Area Informatics tidak berfungsi kalau tidak ada kesadaran dari masyarakat sendiri. Selain itu, perlu juga adanya kerjasama antar berbagai lembaga dan pihak yang bertanggung jawab sesuai dengan tujuannya. Jika kerjasama sudah terjalin dengan baik, maka bidang informasi di Indonesia, khususnya Aceh akan menjadi suatu daerah modal pertama untuk mengembangkan perekonomian kreatif pasca bencana alam dari negara-negara lain di dunia.

Hadirin yang kami muliakan,

Mengakhiri sambutan ini, sekali lagi kami menaruh harapan yang tinggi agar TDMRC-Universitas Syiah Kuala beserta dengan CIAS Kyoto University dan semua lembaga terkait yang terlibat dalam kegiatan ini ini dapat menjadi partner pemerintah Aceh untuk terus memperjuangkan berbagai kepentingan dan kebutuhan masyarakat melalui berbagai hasil pemikiran dan ide-ide cemerlang oleh komunitas akademis di bidang kebencanaan.

Amin ya Rabbal alamin.

Billahi taufiq wal hidayah

Wassalamu'alaikum warahmatullahi wabarakatuh.

Akhirnya, dengan mengucapkan Bismillahirrahmanirrahim, pada hari ini secara resmi kami membuka dengan resmi kegiatan International Workshop on Disaster Heritage and Creative Economy: From Perspective of Area Informatics yang akan berlangsung pada tanggal 22 hingga 26 Desember 2011.

Billahi taufiq wal hidayah, Wassalamu'alaikum Wr Wb.

Banda Aceh, 22 Desember 2011

Gubernur Aceh,

Drh. Irwandi Yusuf, M.Sc

Sambutan

Ir Darusman

Pembantu Rektor IV, Universitas Syiah Kuala

Kata penghormatan kepada tamu dan selamat datang.

Pada 7 tahun lalu ketika terjadi tsunami Aceh, banyak nyawa yang hilang, tidak tahu dimana, juga harta benda maupun informasi dan data yang sangat berharga, untuk itu data yang hilang perlu dikumpulkan kembali dibuat database dan berbagi kepada saudara-saudara mancanegara.

Selama rehab rekon banyak info terkait kebencanaan, perlu disusun dan dimanfaatkan secara efektif dan efisien dengan demikian memanfaatkan info dan data perlu teknologi dan informasi dan pemahaman budaya sosial untuk mengaplikasikan informasi dari data bencana alam tersebut.

Salah satu komitmen yang sudah dibuat oleh CIAS dan TDMRC adalah mengembangkan teknologi pengolahan database Informasi dan lembaga ini bisa digunakan sebagai badan arsip dunia, kita berharap untuk bisa membuka jaringan luas baik di dalam maupun luar negeri, hari ini symposium merupakan hasil dari networking antara Kyoto University dan TDMRC, kami juga ingin mendengar lebih banyak lagi hasil kajian antara LIPI, JICA dan TDMRC. Kami sangat bahagia dengan adanya kerjasama ini dan hari ini merupakan wujud nyata dari Ilmu Area Informatic. Saat ini merupakan kesempatan berkiprah sebesar besarnya khususnya Area Informatic utk membangun dimasa yang akan datang.

Harapannya produk dari symposium ini bisa diimplementasikan dan berbagi sesama kita, baik didalam dan luar negeri dan dimanapun wilayah di dunia. Kami percaya dengan adanya Area Informatic bisa tercapai perjuangan pengurangan bencana dan berbagai pemikiran di symposium ini dapat dijadikan lesson learn bagi Jepang dan Indonesia .

SAMBUTAN
International Symposium and Workshop:
“Disaster Heritage and Creative Economy:
From Perspective of Area Informatics”

Prof. Dr. Hayashi Yukio

Director of Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University, Japan

Peu Haba? Selamat pagi dan salam sejahtera buat kita semua. Saya Hayasyi Yukio, Direktur Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University, Japan. Saya merasa senang sekali karena kita dapat berkumpul di tempat ini dalam rangkaian kegiatan Workshop/Simposium Internasional yang diadakan di Banda Aceh selama 6 hari pada masa menjelang hari peringatan bencana alam gempa bumi dan Tsunami tahun 2004 di Aceh. Atas nama CIAS, kami ingin mengucapkan terima kasih kepada rekan-rekan panitia pelaksana dari Tsunami Disaster Mitigation Research Center (TDMRC), Universitas Syiah Kuala, progra penelitian kerjasama antara JST, JICA, LIPI, dan Kementerian Riset dan Teknologi (Kemenristek), dan semua pihak yang telah bekerja keras sehingga terlaksananya kegiatan yang kita mulai saat ini. Pada kesempatan ini, saya ingin memperkenalkan kegiatan lembaga kami CIAS dan juga tentang Area Studies atau Kajian Wilayah yang kami kembangkan selama ini.

CIAS didirikan pada bulan April pada tahun 2006 sebagai salah satu Pusat Penelitian di Kyoto University. CIAS diharapkan dapat menjalankan fungsi dan peranannya sebagai institusi akademik dalam upaya memberdayakan riset kerjasama antara berbagai perguruan tinggi di Jepang. CIAS telah disahkan oleh Kementerian Pendidikan dan Sains atau Mombusyo di Jepang sebagai sarana induk dalam hal kerjasama antara berbagai perguruan tinggi maupun lembaga penelitian di Jepang. CIAS merupakan suatu organisasi unik yang didirikan khusus untuk mendorong kerjasama antara berbagai lembaga supaya dapat mengembangkan Kajian Wilayah di Jepang.

Kini CIAS mempunyai 13 orang staf akademik terdiri dari Profesor, Profesor Madya, dan Asisten Profesor dalam 3 bidang yaitu (1) Integrated Area Studies, (2) Database, (3) Area Informatics. Semua staf memiliki pengalaman pernah menetap di tempat lapangan, berbahasa tempatan dan memiliki pemahaman yang sangat baik tentang wilayah masing-masing. Diantaranya ada ahli Asia Timur, ahli Asia Tengah, ahli Asia Tenggara, ahli Amerika Selatan dan beberapa ahli kajian wilayah lainnya. Fokus wilayah kajian CIAS menyebar di seluruh dunia. Termasuk, membawa hasil penelitian dari mancanegara dan melakukan studi banding.

Salah satu keunikan kegiatan CIAS adalah program penelitian gabungan. CIAS membagi dana riset kepada kelompok penelitian yang terdiri dari berbagai lembaga penelitian yang berniat mengembangkan Kajian Wilayah. CIAS memiliki keunikan kegiatan yang lain, yaitu CIAS menyediakan sistem platform informasi dimana peneliti-peneliti dari berbagai lembaga dapat menggunakan informasi yang dikumpulkan dan ditempatkan di CIAS.

CIAS memfasilitasi jaringan antara lembaga penelitian dan instansi penelitian Area Studies. CIAS sebagai sekretariat Japan Consortium for Area Studies (JCAS) yang terdiri dari 93 lembaga dan organisasi seluruh Jepang menjalankan berbagai program riset dan menyokong dan mempromosikan jaringan penelitian dengan menerbitkan majalah akademik, News Letter dan Mail-magazine. CIAS memberi sokongan dan bimbingan untuk menyelenggarakan konferensi akademik melalui JCAS setahun 100 kali.

Kini CIAS menfokuskan Area Informatics atau Informatika Wilayah sebagai tema kegiatan utama. Area Informatics adalah bidang akademik yang baru tercipta sebagai gabungan Area Studies dan ilmu

Informatics. Dengan menggunakan Area Informatics tersebut, informasi yang berlainan jenis dapat dipersatukan dan dimanfaatkan dengan cara terbuka umum dan sesuai dengan kebutuhan wilayah masing-masing. Sistem Pemetaan Informasi Kebencanaan yang akan diperkenalkan dalam workshop ini merupakan salah satu hasil proyek Area Informatics tersebut. Saya bersyukur karena Sistem Pemetaan Informasi Kebencanaan ini dipublikasikan pertama kali di dunia pada hari ini di Aceh.

Saya tidak melupakan kejadian tragis pada hari 11 bulan Maret tahun 2011, pada saat Jepang mengalami Gempa dan Tsunami besar-besaran di bagian timur Jepang. CIAS sudah lama bekerja keras untuk membangun sistem pemetaan kebencanaan dengan data Gempa dan Tsunami Aceh 2004, dan Gempa Sumatera Barat 2009 di bawah inisiatif Dr. Yamamoto Hiroyuki bersama Dr. Nishi Yoshimi dengan sokongan Prof. Hara Shoichiro dengan keyakinan bahwa Area Studies pasti dapat melancarkan perjalanan rehabilitasi dan rekonstruksi bencana alam. Juga kami mulai program penelitian bagi peneliti-peneliti yang berada di daerah yang terkena bencana alam supaya mereka dapat melanjutkan penelitiannya.

Gempa bumi dan Tsunami di Wilayah Timur Jepang tahun 2011 telah menimbulkan korban jiwa sejumlah 20 ribu orang dan kerusakan kehidupan masyarakat setempat. Pemandangan daerah pun berubah total. Saya rasa, masyarakat Aceh dapat memahami perasaan dan kesulitan yang sedang dialami oleh masyarakat Jepang, karena Aceh pernah mengalami kesulitan yang sama sebelumnya. Kita tidak bisa menghentikan pertanyaan mengapa mereka jadi korban, apa yang kita sepatutnya buat setelah kehilangan keluarga, kerabat dan sanak saudara. Banyak lagi pertanyaan-pertanyaan lain yang sulit kita jawab. Belum lagi pertanyaan yang muncul begitu kita memulai penanganan terhadap korban, bagaimana kita membina hubungan antara manusia yang datang dari latar belakang suku dan agama yang berbeda, dan bagaimana kita dapat melancarkan kerjasama antara masyarakat yang berbeda latar belakangnya.

Seorang sastrawan Russia pernah mengatakan bahwa warna kebahagiaan bagi setiap orang adalah sama, tetapi warna kesedihan dan kesulitan bagi setiap orang masing-masing berbeda. Area Studies merupakan ilmu yang memberi perhatian terhadap perbedaan warna wilayah masing-masing. Karena itulah Area Studies merupakan ilmu yang mampu mengaplikasi dan menterjemahkan berbagai hasil ilmu pengetahuan sesuai dengan kebutuhan masyarakat dan wilayah. Dalam hal ini, Area Studies berperan penting pada saat darurat. Pengalaman Aceh maupun pengalaman Jepang setelah mengalami bencana alam besar-besaran pasti perlu diketahui dan diartikan bersama-sama oleh masyarakat di seluruh dunia.

Sejak semula, ilmu dan sains adalah suatu bentuk kearifan untuk mencegah persoalan di lapangan dan memberi panduan kepada masyarakat yang sedang menghadapi kesulitan. Hasil kajian Area Studies pun harus dikembalikan kepada masyarakat, tidak hanya sebatas kalangan akademis saja. Dalam hal ini Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University dan Tsunami Disaster Mitigation Research Center (TDMRC), Universitas Syiah Kuala telah bersepakat membina hubungan erat dan baik dalam upaya mengembangkan Area Informatics dan memberdayakan sumber daya manusia dalam bidang kebencanaan di Aceh dengan MoU yang akan ditandatangani pada tanggal 24 December 2011.

Yang terakhir saya ingin menyampaikan harapan, bahwa workshop internasional “Disaster Heritage and Creative Economy: From Perspective of Area Informatics” dapat membuka hubungan baru antara ilmu sains dan kepentingan masyarakat serta hubungan baru antara masyarakat Jepang dan masyarakat Indonesia pada umumnya, dan masyarakat Aceh pada khususnya.

Demikian harapan kami, terima kasih banyak atas perhatian Bapak-Ibu sekalian.



SAMBUTAN

Direktur Tsunami and Disaster Mitigation Research Center (TDMRC) Universitas Syiah Kuala

Assalamu'alaikum wr. wb.

Hamdan wa syukran Lillah. Salatan wa salaman 'ala Rasulillah, wa'ala alihi washahbihi waman-walah. Pertama-tama marilah kita panjatkan segala puji dan syukur kehadiran Allah subhanahu wa ta'ala yang telah melimpahkan nikmat dan rahmat-Nya berupa kesehatan dan kesempatan kepada kita untuk hadir pada acara ini. Selawat dan salam kepada junjungan kita Nabi besar Muhammad SAW, pembawa risalah kebenaran, perajut peradaban, dan penuntun ummat manusia ke jalan yang di ridhai Allah SWT.

Setelah Gempa dan Tsunami yang terjadi pada tanggal 26 Desember 2004 di Aceh, banyak pengalaman dan informasi dan pengalaman terkait dengan penanggulangan bencana alam dan proses rehabilitasi dan rekonstruksi telah dikumpulkan dan disusun di Aceh dan dapat dibagi kepada Jepang yang juga mengalami hal yang sama pada 11 Maret 2011. Bagaimana agar informasi ini dapat digunakan dan dimanfaatkan secara efektif dan efisien, salah satunya adalah dengan menyusun, menyimpan, membagi, dan mengembangkan data dan informasi tersebut dalam banyak bentuk yang teratur kepada masyarakat.

Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University, salah satu lembaga penelitian dalam bidang Area Informatics di Jepang bekerja sama dengan Tsunami and Disaster Mitigation Research Center (TDMRC), Universitas Syiah Kuala di bawah payung JICA-JST-LIPI-Ristek Joint Research Project: Mutli-dischiplinary Hazard Reduction from Earthquakes and Volcanoes in Indonesia mengadakan *International Symposium and Workshop on Disaster Heritage and Creative Economy: from Perspective of Area Informatics* pada tanggal 21 hingga 26 Desember 2011 di Banda Aceh. Simposium dan workshop ini diselenggarakan untuk mensosialisasikan hasil kerjasama antara kedua lembaga penelitian dan memberdayakan sumber manusia dalam bidang penanggulangan bencana alam dan pembangunan ekonomi daerah dengan cara kreatif sekaligus dalam rangka memperingati 7 tahun bencana Gempa dan Tsunami di Aceh.

Tujuan simposium dan workshop ini adalah untuk memperkenalkan ilmu pengetahuan dan teknologi dalam upaya meningkatkan penanggulangan bencana alam dan dapat membangun ekonomi daerah dengan cara-cara yang kreatif. Selain itu untuk meluncurkan dan mensosialisasikan sistem online Arsip Pemetaan Tsunami dan Gempa Aceh 2004 dan sistem online Pemetaan Informasi Bencana Alam dan Informasi Sosial di Indonesia. Kegiatan ini juga sebagai wadah untuk mempelajari cara yang dapat berfungsi untuk memanfaatkan warisan Tsunami dan Gempa sebagai modal dasar untuk membangun ekonomi daerah dengan menggunakan teknologi informasi bersama berbagai lembaga terkait seperti Dinas Pariwisata, Dinas Pendidikan, Bappeda, Museum, Arsip, dan Perpustakaan. Sumberdaya manusia dalam bidang ini dapat dikembangkan melalui simposium dan workshop selama 6 hari ini. Diharapkan kegiatan ini juga dapat mempererat hubungan kerjasama ilmu antara TDMRC Unsyiah dan CIAS, Kyoto University dalam rangka pendidikan dan pengajaran, penelitian dan pengabdian pada masyarakat bidang penanggulangan bencana.

Dengan menggunakan ilmu pengetahuan ini, lembaga-lembaga yang menangani dan mengurus

informasi terkait dengan kebencanaan dapat menyusun dan membuka info yang dimiliki masing-masing lembaga dengan cara terbuka dan sesuai dengan kebutuhan. Upaya seperti itu dapat menjadikan Aceh sebagai laboratorium alam yang dapat dieksplorasi untuk pengembangan Ilmu Pengetahuan dan Teknologi (IPTEK), budaya dan sosial.

Billahi taufiq wal hidayah, Wassalamu'alaikum Wr. Wb.

Banda Aceh, 21 Desember 2011

Dr. Ir. M. Dirhamsyah

Sambutan

Dr Muhammad Nasir

Pembantu Rektor IV, Universitas Syiah Kuala

Ucapan dan hormat kepada hadirin,

Bencana tsunami Aceh dan Jepang telah menimbulkan dampak yang banyak baik fisik dan informasi, karena itu Jepang dan Indonesia harus menjalin kerjasama yang erat dalam rekonstruksi dan informasi agar informasi lebih tersusun rapih, sehingga dengan workshop ini bisa menata kembali data tersebut dan workshop ini bertujuan untuk memperkenalkan area informatic utk mengembangkan daerah dengan tujuan meningkatkan penanggulangan bencana alam dan membangun ekonomi daerah dengan cara kreatif, Meluncurkan dan mensosialisasikan *Sistem Online Pemetaan Arsip Tsunami dan Gempa Aceh 2004* dan *Sistem Online Pemetaan Informasi Bencana Alam dan Informasi Sosial di Indonesia* melalui <http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh>, dan <http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Indonesia>, mempelajari cara yang dapat berfungsi untuk memanfaatkan warisan Tsunami dan Gempa sebagai modal dasar untuk membangun ekonomi daerah dengan menggunakan teknologi informasi bersama berbagai lembaga terkait seperti Dinas Pariwisata, Dinas Pendidikan, Bappeda, Museum Arsip dan Perpustakaan. Membangun hubungan dasar untuk kerjasama antara TDMRC Unsyiah dan CIAS, Kyoto University dalam rangka penelitian dan pendidikan bidang penanggulangan bencana alam dan Area informatic secara terus-menerus. Memberdayakan sumber daya manusia dalam bidang Area Informatics dengan workshop selama 3 hari. Sasaran utama adalah mahasiswa S2 program studi kebencanaan, S2 yang telah memperkuat Unsyiah ada 18. Dan S2 Kebencanaan ini diharapkan bisa membangun kerjasama antara CIAS dan TDMRC secara terus menerus,

Harapan dari ini bisa menciptakan sistem online gempa dan tsunami dan info bencana alam dan sosial dan basis area informatic dan MOU antara TDMRC dan CIAS sukses.

Sesi Permulaan

Presentasi I: Kajian Wilayah dan Area Informatics (Ilmu Informatika Wilayah)

Pembicara: Masayuki Yanagisawa, CIAS, Kyoto University

Pertama mengucapkan terimakasih kepada hadirin dan diberi kesempatan untuk mempresentasikan tentang Area Informatic dalam kaitannya dengan pembangunan daerah dan area informatic. Saya adalah Prof. Yanagisawa dari Kyoto University mewakili selaku pimpinan CIAS untuk memperkenalkan area informatic.

Menjelaskan apa itu kajian wilayah?

- bertujuan untuk merespon dan menjawab cabaran global tidak hanya dari segi teori saja tetapi juga dengan mempelajari kenyataan di wilayah dan masyarakat.
- Area Studies meneliti fakta nyata di lapangan di wilayah dulu lalu menganalisis dan menyusun teori daripadanya. Kemudian teori itu diaplikasikan kepada wilayah-wilayah lain.

Jika ilmu akademik tradisional, teori-teori pada umumnya dibawa dari negara-negara Eropa dan Amerika lalu diaplikasikan kepada wilayah-wilayah lain, sekarang kita mencoba wilayah Jepang dan Indonesia untuk menjadi contoh bagi Negara lain.

Latar belakang

- Sebelum Perang Dunia II...mempelajari keadaan sumber daya alam dan sosial di wilayah penjajahan
- Ex. Dokumen Hindia Belanda, Giografi Tropikana di Prancis, Dokumen Parlemen Ingris (BPP)
- Zaman Perang Dingin, mempelajari politik / ekonomi negara bersekutu barat
- Setelah 1960-70an, mempelajari keadaan wilayah dalam upaya penyokongan dan kerjasama internasional dalam bidang pembangunan
- Setelah 1980an, Area Studies berperan untuk menjembatani sosial wilayah dengan perubahan global dalam era globalisasi

Ciri Khas Area Studies

1. Kajian antaradisiplin ilmu sosial, ilmu budaya, dan ilmu alam.
2. Merespon cabaran aktual dan global, hubungan antara pusat dan daerah, ekologi, sustainable development
3. Menghargai keunikan wilayah masing-masing

Dapat menganalisa persoalan yg rumit yang tidak bs diselesaikan dalam 1 bidang saja, misalnya untuk mencegah lingkungan hidup ada berbagai sisi, bagaimana melindungi alam, bagaimana membina masyarakat setempat, Ilmu aktual antara daerah dan pusat sinkron, misal penanggulangan bencana alam, bagaimana meningkatkan dan melancarkan PRB dan menghargai keunikan wil masing2, misal kalau dulu yang menjadi teladan negara barat atau amerika, sekarang wilayah lain bisa menjadi teladan di seluruh dunia.

Apa itu Area Informatic atau informatika wilayah?

Selama ini pengalaman lokal hanya dimanfaatkan oleh masy setempat, karena merupakan warisan turun temurun, utk wil lain perlu area informtic, dapat menangkap gambaran yang jelas dengan kearifan lokal dan dapat dimanfaatkan wilayah lain. Dengan konsep area informatic, GIS, internet dll dpt mencari data2 yg berbeda jenis, dengan menggunakan teknologi informatica wilayah dapat mencari nafkah dari berbagai informasi yang ada

Kearifan Lokal

Apa saja yang bisa dilakukan dengan Kearifan Lokal

1. Pertanian masing-masing wilayah bagaiman cara yang tepat untuk masyarakat di daerah tersebut
2. Tentang dokumentasi pemerintah pusat dan daerah sama, dan bisa dimanfaatkan masyarakat wilayah lain

3. Buku dokumen naskah misalnya untuk menulis thesis, harus mencari ke tempat-tempat yang terpencar dan tidak bisa dicari sekaligus dan serentak, dengan area informatika bisa dipakai secara terbuka dan umum
4. Data yang bentuknya beda-beda, gambar film, statistik dengan menggunakan area informatik yg ditanamkan bisa digunakan sekaligus.

Presentasi II: Perkembangan Pemetaan Risiko Bencana di Aceh

Eldina Fathimah, TDMRC, Universitas Syiah Kuala

Latar Belakang

- Mengacu pada HFA
- Berdasarkan UU No 24 tahun 2007 tentang Penanggulangan Bencana
- Berdasarkan UU No 26 tahun 2007 tentang Tata Ruang
- Berdasarkan Perda Provinsi Aceh no. 21 tahun 2003 tentang rencana tata ruang wilayah Provinsi Aceh
- Adanya kebutuhan pengurangan risiko bencana melalui penyusunan rencana tata ruang berbasis mitigasi bencana

Tujuan Penyusunan Peta Risiko Bencana Aceh (ADRM)

1. Identifikasi karakteristik bencana yang ada
2. Penyiapan peta risiko bencana sebagai dasar RTRW
3. Dasar untuk penyusunan RPB (Rencana Penanggulangan Bencana), RAD PRB (Rencana Aksi Daerah Pengurangan Risiko Bencana)

Pendekatan partisipatif

1. Multi stake-holder
2. Menggunakan data yang sudah tersedia dari berbagai sumber
3. Pendekatan triple- A (Atlas-Agenda-Aturan main)

Tujuan pembentukan Tim Kerja Multi Stakholder

Kerjasama dan koordinasi lintas sektoral antara akademik dan lembaga penelitian, masyarakat, swasta, LSM dan pemerintah

Metodologi

Tahap 1 – ATLAS

Tahap 2 – Identifikasi tipe bencana didasarkan pada data dari ATLAS

Tahap 3 – peta-peta bahaya, kerentanan, kapasitas dan risiko bencana menggunakan informasi ATLAS

Tahap 4 – overlay GIS didasarkan pada perbandingan peta risiko bencana dan peta perencanaan tata ruang (struktur ruang, pola ruang dan kawasan strategis) dalam bentuk AGENDA

Tahap 5 – merekomendasikan RTRW berbasis mitigasi bencana didasarkan pada analisis GIS disusun dalam dokumen ATURAN MAIN

Peta Risiko Bencana Berbasis Online

Dikembangkan oleh Dr.Nasaruddin dari Divisi Knowledge Management TDMRC yang mengimplementasikan secara online peta risiko hasil analisis offline yang disebut DRMIS (Disaster Risk Management Information System)

Pengembangan di Masa Yang Akan Datang

1. Kerjasama dengan CIAS dengan pengaksesan data Remote Sensing yang memiliki resolusi tinggi kurang dari 1 m (ASTER, IKONOS, SPOT, dll) sehingga peta risiko bencana Aceh dapat ditingkat keakuratannya
2. Bersama TDMRC dalam mengakses database di Aceh untuk melakukan rapid assessment.

Presentasi III: Aceh Tsunami Mobile Museum

Hiroyuki Yamamoto, CIAS, Kyoto University

Sebelum kami memulai pembicaraan saya ingin menjelaskan mengapa bahasanya bukan bahasa Inggris, tetapi menggunakan bahasa Indonesia dan Jepang, dari pengalaman kami selama ini ikut bergabung dalam proyek kerjasama Indonesia dan Jepang, dan biasanya bahasa Inggris yang dijadikan alat komunikasi, coba bayangkan kalau dalam bahasa Inggris, kata tsunami tetap tsunami, dan kata lahar juga tetap sama, karena Jepang dan Indonesia mempunyai pengalaman bencana dan pengalaman rehabilitasi, jadi kami berpikir Indonesia dan Jepang sepatutnya jadi contoh yang baik dan teladan dunia dalam bidang penanggulangan bencana, maka sepatutnya menggunakan 2 bahasa tersebut dalam persidangan internasional tentang penanggulangan bencana alam. Kami memutuskan di Aceh lah kami pertama kali mempresentasikan konsep mobile museum atau museum terbuka dan ini presentasi kami pertama di seluruh dunia pada hari ini.

Kami membuat prototype sistem mobile museum utk pemetaan daerah bencana gempa Sumbar 2007, (lihat gambar): Pada saat bencana, air, makanan dan info sangatlah dibutuhkan, semua info ada di lapangan, tetapi terkadang kita yang di luar wilayah tidak bisa dapat info yang lebih bagus, pada saat gempa Sumbar kami mencari info mencari dampaknya, tetapi informasi yang kami dapat dalam bahasa Inggris dan susah sekali mencari informasinya, begitu kami mencari dalam bahasa Indonesia di internet maupun koran, ada banyak sekali informasi yang kami dapat, kami menyadari bahasa lokal sangat penting.

Dari Prototype ini bisa melihat gambaran umum dari keseluruhan kejadian, cakupan wilayah/lokasi dan informasi yaitu;

- Informasi dalam bahasa Indonesia
- Informasi online
- Pemetaan Informasi
- Menangani darurat

Kemudian kami berhasil membuat edisi baru dari gempa dan tsunami Sumatra 26 Desember 2004, ini bisa di akses online melalui internet, bisa melihat kategori tanggal/waktu, tekan klik dalam peta muncul artikel dan data secara otomatis.

Bagaimana dapat menciptakan area informatic sehingga dapat berguna dan akan dipresentasikan besok.

Tentang mobile tsunami Aceh, kalau hanya ingin membangun museum tinggal buat papan nama saja sudah bisa membuat museum, tetapi dengan tsunami mobile Aceh ada tambahan, data data info sebelum dan sesudah bencana terjadi, dan bisa di akses oleh masyarakat seluruh dunia.

Bagaimana mengembangkan Kota Banda Aceh menjadi pusat Pariwisata

1. Dijadikan museum alami, tidak terputus dari letak lokasinya, walaupun berjauhan situs2 monumen tsunaminya tetapi semua data nya terkumpul
2. Memonitor apa yang berminat bagi masyarakat dunia diluar wilayah, memikirkan apa yang menarik hati orang bersama dengan orang diluar daerah,
3. Apa yang menarik hati orang lain dengan keunikan dengan kisah kisah atau cerita naratif
Ditampilkan gambar gambar perkembangan suatu tempat mulai dari terkena bencana samapi selesai nmasa rehab rekon, seperti bantuan rumah dari begara tertentu menurut orang luar sangat menarik. Dan bisa diskusi di dalam web museum mobile, dan bisa berdialog kegiatan seperti itu bisa mengembangkan pariwisata kota banda aceh

TANYA

Abdul Muzakir (Badan Lingkungan Hidup): ini suatu yang monumental, kita rindu akan kegiatan seperti ini, Jepang dan Aceh, kalau tadi dikatakan dalam 2 bahasa, saya mengatakan ada 3 bahasa termasuk bahasa Aceh karena tadi Pak Yamamoto sudah menyebutkan kata "Peu Haba?", dan saya ingin menjawab "haba get". sebelumnya di paper Pak Hayasi, mengutip sastrawan Rusia bahwa "

Warna kebahagiaan adalah sama, tetapi warna kesedihan selalu berbeda bagi setiap orang.” di ruangan ini ada juga sastrawan Aceh, “Orang sering tertawa bersama saat bahagia, tetapi orang tidak bisa menangis bersama saat berduka.” Tetapi hari ini Jepang sudah membuktikan bahwa Jepang dan Indonesia bisa tertawa bersama. Di Aceh juga ada kearifan lokal yaitu smong yang bisa digunakan sebagai kajian dalam masalah area studies and area informatic, ada juga kearifan lokal seperti ie beuna. Apa yang menjadi trend kedepan pembangunan yaitu disaster ekonomi, sebagai kebijakan implementasi, kalau tidak jelas programnya anggaran dari pemerintah akan sia-sia, kalau daerah tidak melakukan kebijakan yang berbasis mitigasi bencana seperti ini, harus ada kajian yang dipersiapkan sebelumnya dalam mengajukan anggaran dari pemerintah pusat. Karena seperti kita ketahui bencana juga diakibatkan karena ulah manusia sendiri yang salah dalam menerapkan pembangunan. Kedepan perlu ditingkatkan implementasi untuk daerah rawan bencana, bisa tidak dilakukan regulasi kebijakan yang berbasiskan data bencana, sehingga dana yg dianggarkan tidak datang tiba-tiba. Kalau perlu regulasi itu harus dipaksakan menjadi suatu kewajiban. Sehingga Jepang dan Indonesia bisa menjadi contoh dunia.

Riswan (Dinas Pertambangan dan Energi Aceh): salut yang sebesar besarnya karena hanya dalam teknologi ini menggunakan bahasa Indonesia dan Jepang, dan dalam beberapa presentasi tadi ada disinggung tentang kearifan lokal apa yang harus dimunculkan, dengan kearifan lokal banyak membantu dalam penanggulangan bencana, kalau bisa kearifan-kearifan lokal tersebut dijadikan satu syair dan nasehat yang akan diturunkan kepada anak cucu dalam upaya mitigasi bencana.

JAWAB

Yamamoto: Terkait dengan hal yang disarankan dari bapak Abdul Muzakir, sependapat dengan bapak tentang dampak social oleh bencana alam dan itu juga yang ingin kami sarankan. Menurut pertemuan area informatics untuk cabaran bencana sosial, dari hal kecil kecil dalam masyarakat jika dibiarkan akan menjadi besar dan menjadi bencana sosial.

Eldina: upaya paksa dalam melakukan regulasi di pemerintah yang harus berbasis bencana saya setuju pak, dan jangan lupa harus mengikut sertakan peran serta masyarakat yang berpendidikan, kalau masyarakat berpendidikan, maka akan merasakan sendiri apakah aturan itu bermanfaat untuk daerahnya. Dan satu tambahan lagi bahwa kearifan lokal merupakan kapasitas untuk mengurangi resiko bencana, jika suatu daerah mempunyai kearifan lokal maka akan mempunyai kapasitas yang lebih baik dari daerah lain.

Yanagisawa: kearifan lokal dan kami juga tertarik tentang kearifan lokal, yang selama ini hanya dimanfaatkan di masing masing tempat atau daerah saja, dan seharusnya bisa digunakan ditempat dan wilayah lain, kearifan lokal harus diselamatkan dan dihidupkan seperti syair, syair juga harus multi fungsi bukan hanya digunakan sebagai media saja, dan bisa digunakan dengan manfaat lain seperti untuk mitigasi bencana, pariwisata dan bagaimana teknologi Area Informatic bisa mengubahnya sehingga hal demikian bisa diwariskan dan dilestarikan, jadi kearifan lokal jangan cuma memiliki 1 makna saja tetapi juga banyak fungsi.

Sesi I: Pembagian Informasi pada masa Darurat

Presentasi 1: Penerapan Informasi, sains dan teknologi

Pembicara: Dr. Muhammad Dirhamsyah, TDMRC, Universitas Syiah Kuala

Data, informasi dan pengetahuan dimana Ide, nilai, dan model yang ini akan kita kembangkan. Inovasi berkelanjutan, Bagaimna kita melakukan inovasi-inovasi yang berkelanjutan dan bagaimana nilai tambah yg ini akan kita perhatikan.

Kita duduk bersama hari ini antara jepang dan aceh, dan bagaimana memebuat nilai tambah, apa itu sains sebenarnya sangat sederhana. Sedangkan teknologi bagian dari sains. Kita melihat disini ada alarm yg bagus dan ada ada alarm yang tidak bagus.

Produk pengetahuan, Ada beberapa produk yang dapat kita lihat, bagaimana, Segiempat produk, bagaimana melakukan produk riset, kita ada suatu produk yg lebih bagus lagi, sebagai produk informasi. Kita harus menjadi satu satuan kolaborasi kreasi dan pembelajaran pengetahuan pada tahun 2004, kalau dilihat Inilah salah satu sains diekpresikan dalam kartun, jadi kita melihat ekspresi yg dibuat oleh orang jepang saat itu. Inovasi ini adalah pengetahuan, sejarah pendidikan dasar. Sebenarnya ini diperlukan untuk meningkatkan nilai, sehingga nilai tambah pemerintah meningkat.

Pembelajaran yg mahal ini kita usahakan, memberikan informasi dan sharing kepada masyarakat yang lain, dan inilah tugas kita bersama-sama. Pengetahuan dasar dan sangat penting, dan sharing dengan masyarakat lain. Apalagi kita punya sahabat dari CIAS untuk menjalankannya bersama-sama. Siklus bencana, kita melakukan kesiapan untuk melihat kita tangguh kepada bencana, bagaimana kita tangguh terhadap bencana tadi, masyarakat tersempit harus terlibat aktif. Kondisi yg diharapkan pada 2011, bagaimana tugas kita disuatu riset cuaca ekstrim, dan memberikan solusi kepada masyarakat Aceh dan Internasional. Kita tidak sendiri kita punya partner, apalagi kita sekarang bekerjasama dengan pihak CIAS. Kita ada produk bagaimana kita melihat semua kegiatan dengan GPS yang dibantu dengan Jepang.

Ini peta yang diberikan dan di pakai pemerintah Aceh untuk dipakai kedepannya. Salah satu contoh simulasi dari peta sederhana kita melihat suatu simulasi kelihatan disini ada beberapa bangunan, dilihat mereka mencari tempat lebih tinggi sebenarnya bagaimana orang pergi ketempat yang lebih tinggi.

Rencana tahun 2012 mempersiapkan diri sebagai sains dan bisa dimanfaatkan oleh berbagai Negara. Sekian dan terimakasih.

TANYA JAWAB

Tanya: Bustami (Dinas kebudayaan Aceh Besar): Melihat dari informasi, selama ini kita melihat banda aceh saja, tanpa melihat aceh besar, yang ada beberapa desa yg hilang perlu adanya informasi, Berbicara pengetahuan kepada orang awam, kenapa tsunami itu terjadi, perlu ada informasi yg perlu di beritahukan ke masyarakat. Kearifan lokal kita sinetiskan baik, itu tari-tarian, perlu adanya kerjasama lebih dalam system adat selama ini.

Jawab: Kita sudah diarah sana tapi yg dipresentasikan hanya ini, sayangnya ada beberapa yg tidak terekam dengan kita, jadi kalau bisa nanti kita bisa bersama-sama dapat mengatasinya. Tentang pendidikan kita ada pusat riset, kita ada sekolah, dan ada buku komik, ketarifan local sangat terpengaruh sekali.

Presentasi 2: Sistem Pemetaan Informasi Bencana dan Penerapannya

Pembicara: Dr. Hiroyuki Yamamoto, CIAS, Kyoto University

Saya ingin berencana apa sebenarnya tsunami mobile museum, sebetulnya rekan-rekan disini bisa akses langsung menggunakan smart ponsel dengan website www.disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh/.

Kota Banda Aceh dijadikan Museum lapangan dimana kita dapat melihat barang bernilai di tengah

suasana alami dan mendapat info latar belakangnya. Memonitor apa yang berminat bagi masyarakat dunia di luar wilayah, memikirkan apa yang menarik hati orang bersama dengan orang di luar daerah. Orang tertarik dengan cerita dan keunikan...keunikan terdapat dengan cerita / naratif.

Kami pilih kategori lalu tampil hasil pencarian. Di kawasan Meuraxa, kita tampilkan masing-masing ikon, kalau dalam website langsung muncul tulisan baru, ada beberapa artikel, sayangnya kurang bagus dengan akses internet kali ini tapi.

Kami mencari berita, disitu ada buku besar, tpi kalau dengan system kami hanya masukan kategori atau tanggal langsung muncul, cara munculnya juga ada cri khas, ada juga ditempat berbagai informasi, misalnya mencari peunayong, kami informasikan meseum ini dgn computer asalkan ada computer dan akses internet. Kalau ini bisa dikatakan database berita dan gambar terkait bencana alam, mengkaji dan meiliti bencana alam, dan bisa juga akses ke bidang lain.

Sekarang kami ingin memperlihatkan nanti gambar, ada ikon tsunami, ikon bendera Itu adalah sasaran pariwisata yg kami piker. Sebetulnya system ini ada 2 halaman, skrg yg muncul adalah nama-nama huruf Ulelhe, untuk apa itu huruf pariwisata yg coba kami susun, coba tekan. Kalau pilih Ulelhe muncul tempat-tempat yang digabungkan dalam huruf Ulele ini titik mula mesjid, titik ke dua meseum tsunami, Titik 3 tugu cina tsunami, Titik ke empat taman terimakasih, tiit ke lima kapal, titik keenam kuburan massal Meuraxa, mesjid meuraxa, TDMRC.

Ini bisa diakses melalui ponsel masing-masing juga, misalnya dari akses mesjid Baiturahman, jadi baiknya kami bisa mmbawa database, mungkin saja sedang membenahi. Untuk sementara titik yang sudah disusun dalam sistem ini, hnya beberapa titik yang kami pilih, mugking ada pendapat-pendapat dari ibu kenapa tidak lengkap, jadi masing-masing bisa mehubungkan informasi tentang CIAS kalau ada gambar lebih bagus, nanti kami bisa kelola, mungkin masyarakat disini bisa bekerjasama untuk menolah informasi-informasi ini. Terus dengan menggunakan sistem tidak hanya peninggalan tsunami saja, tapi bisa juga dimiliki informasi-informasi dari aceh bisa saja menarik hati manusia, bisa dikatakan meningkatkan niat mereka untuk datang ke Aceh.

TANYA JAWAB

Rahmadhani (Dinas kebudayaan Aceh): Mempunyai tugas mengembangkan budaya, dalam konsep budaya membangun kesiagapan bencana, disitu sangat menarik karena bersifat global, perlu kita pikirkan dan perlu project, masyarakat Sinabang bisa dijadikan pilor project, apapun dalam jangka panjang.

Yamamoto: Terimakasih telah komentar yang sangat baik, dari berbagai batas daya kami, kami pendatang dan seluruh dunia tau Aceh sudah ada konflik, aceh sudah mengalami sangat besar sudah berhasil mengatasinya terhadap dua masalah konflik dan bencana alam, oleh karena itu dunia sangat memperhatikan Aceh. Sistem pemetaan ini adalah peta system. selanjutnya kalau ada gambar dan artikel, bisa membuat akses ini, membawa akses-akses dengan bagus, selanjutnya daftar nama kampung, mengembangan sistem pemetaan ini informasi ini lebih banyak masyarakat setempat.

Asmahan (forum resiko): bagaimana meningkatkan kualitas siswa dalam mencari informasi tentang pemahanan dan pengetahuan mereka tentang kebencanaan. adakah ahli di jepang, dimana kita lihat korban yang timbul di jepang hanya sedikit memakan korban, apakah ada modul dan kurikulum di Jepang dan kita terapkan disini?

Yamamoto: Yang benar seperti pendidikan sangat penting untuk membina, tapi kami pikir ada cara yg tepat seperti di jepang, kalau di Jepang berhasil bukan berarti di Indonesia juga berhasil karena kondisi alam yang berbeda. di Jepang populer komik, populer bukan hanya untuk anak-anak tapi dewasa, kalau di Indonesia orang dewasa baca komik itu aneh, ada cara-cara tertentu agak lebih tepat di masing-masing tempat. Masyarakat berpikir bagaimana yang lebih cocok, kearifan local dicopykan sejak dini ketangan guru-guru disekolah masing-masing bekerja sama

Sesi presentasi II: Warisan Bencana, Museum dan Pariwisata

Presentasi 1: Kegiatan Kerjasama Dinas Pendidikan Aceh dengan DRR-A UNDP

Pembicara: Husaini, Dinas pendidikan Aceh

Kata-kata sambutan,

memikirkan anak-anak didik mengetahui tentang kebencanaan, yang menjadi perhatian berbagai macam bencana yang terjadi di Aceh. Sebelum tsunami ada beberapa masalah yang dihadapi Aceh, misalnya konflik social, wabah penyakit dan sebagainya.

Latar belakangnya Aceh merupakan salah satu daerah di Indonesia yang rawan bencana, di antaranya gempa bumi dan tsunami. Selain itu, Aceh pernah mengalami masa konflik berkepanjangan dan berdampak kepada masyarakat, termasuk anak-anak. Bencana Alam dan konflik sosial akan dapat menjadi bencana bagi masyarakat pada umumnya. DRR-A UNDP melalui kerjasama dengan Disdik Aceh ikut berpartisipasi dalam upaya membekali pengetahuan kepada masyarakat tentang kebencanaan agar kesiap siagaan tumbuh di masyarakat, misalnya melalui pengintegrasian materi kebencanaan dalam pembelajaran di SD-MI.

DRR-A, UNDP melanjutkan kerjasama antara ADEF (Aceh Disaster Educational Forum) dengan Dinas Pendidikan Aceh, dalam hal pendidikan kebencanaan dengan kegiatan penulisan bahan ajar terintegrasi kebencanaan dalam pembelajaran SD/MI. SE Mendiknas No.70a/2010, tentang Pengarusutamaan pengurangan risiko bencana di sekolah. MoU Dinas Pendidikan Aceh dengan UNDP DRR-A tentang pelaksanaan dukungan untuk mengintegrasikan Pengurangan Risiko Bencana ke dalam sistem pendidikan.

Dukungan untuk mengintegrasikan Pengurangan Risiko Bencana (PRB) ke dalam pembelajaran pendidikan SD/MI, SMP/MTs dan SMA/MA

Memasukkan/memadukan/mengintegrasikan Pengurangan Risiko Bencana (PRB) ke dalam pembelajaran pada SD/MI, SMP/MTs, dan SMA/MA.

Pelatihan di Tingkat Gugus, masing-masing Kabupaten dibina 6 gugus, tiap gugus diikuti 6 sekolah, tiap sekolah diikuti oleh 3 orang guru dan 1 komite sekolah. Jadi jumlah pesertanya: 10 Kab. x 6 Gugus x 6 SD/MI x 4 org peserta = 1.440 orang. Monitoring dan Evaluasi kegiatan Sosialisasi tentang pendidikan kebencanaan melalui media massa koran, radio dan TV Penerbitan buletin "Siswa Bicara Bencana" (cerita, info tentang bencana yang ditulis oleh siswa).

Mengembangkan kapasitas personil Fasilitator di tingkat Kabupaten sehingga terjadi peningkatan mutu proses pembelajaran yang menciptakan kesiap-siagaan peserta didik terhadap bencana. Memperkuat kapasitas Fasilitator di tingkat Kabupaten untuk mampu merencanakan, melaksanakan serta memonitor, mengevaluasi aktifitas yang mendukung program DRR-A UNDP. Meningkatkan kapasitas Fasilitator Daerah di tingkat kabupaten untuk mampu membantu Dinas Pendidikan, Kemenag Kabupaten dan sekolah-sekolah/madrasah dalam meningkatkan kesiap-siagaan terhadap bencana.

Membangun struktur manajemen terpadu (benefit) untuk mencapai sasaran, maksud, tujuan, dan hasil melalui program kesiap-siagaan terhadap bencana. Memantapkan kapasitas Fasilitator Daerah di tingkat Kabupaten mengenai substansi materi kebencanaan dengan mengintegrasikannya ke dalam pembelajaran secara aktif, kreatif, efektif dan menyenangkan (PAKEM), untuk mengajak para siswa ikut serta dalam peningkatan kesiap-siagaan terhadap bencana.

Sosialisasi tentang module/ kurikulum yang telah dikembangkan ke Kemendiknas, Kemendagri, Puskur, dan Puspendik. Peluncuran Buku Panduan Pengintegrasian Materi Pelajaran untuk SD /MI Cerdas Cermat tingkat SD/MI (untuk mengukur pemahaman/pengetahuan siswa terhadap materi kebencanaan yang diajarkan). Pesertanya diikuti oleh 124 SD/MI dlm 4 Kab dengan jml peserta seluruhnya 402 org. Melakukan pelatihan di tingkat gugus dalam mengintegrasikannya ke dalam pembelajaran pada jenjang SD dan MI.

Komitmen dari Disdik Aceh atas keberlanjutan program, salah satunya dengan mengalokasikan

program pendidikan kebencanaan di dalam anggaran tahunan. Kemampuan Fasilitator kabupaten/kota masih perlu ditingkatkan terutama dalam pengembangan materi PRB. Alat peraga belum tersedia dalam pengintegrasian PRB dalam Pembelajaran. Simulasi PRB belum maksimal dilakukan hal ini disebabkan oleh alat peraga belum tersedia. Kemampuan guru dalam mengembangkan pembelajaran yang mengintegrasikan kebencanaan masih terbatas. Dinas Kab./Kota belum mengalokasikan dana khusus utk peningkatan kapasitas guru dalam PRB.

Harapan kedepan program ini dapat berkerjasama dengan guru saat melaksanakan pembelajaran. Pembelajaran yang sudah dilakukan bersama wujudkan aceh siaga bencana.

Presentasi 2: Warisan Bencana dan Museum: Bagaimana mewariskan pengalaman bencana pada

Pembicara: Dr. Masahiro Terada, CIAS, Kyoto University

Sejarah tentang museum di Jepang . Museum Pertama di Jepang: Museum Tokyo Nasional pada tahun 1872. Museum di Jepang (2005), museum negeri 196, museum swasta 4418

Bencana Alam di Jepang, gempa, eksplosasi vulkanik, tsunami, topan, salju, kemarau. Ada Museum Khusus untuk menampilkan Bencana Alam, misalnya eksplosasi vulkanik, gempa, dan tsunami. bencana kecil seperti bencana salju, topan tidak jadi sasaran sebagai pameran utama, dianggap salah satu episode dalam sejarah wilayah.

Museum adalah suatu sarana untuk mewariskan pengalaman kepada generasi masa depan turun kemenurun. Museum sendiri berasal dari Eropa seperti koleksi barang berharga untuk bagsawan. Untuk mewariskan pengalaman, kita perlu mengembangkan berbagai metodologi.

Presentasi 3: Dari Pusat Tragedi Tsunami Global ke Pusat Pariwisata Tsunami Global

Pembicara: Rahmadhani, Dinas Kebudayaan dan Pariwisata, Provinsi Aceh

Tragedy tsunami gobal, melihat sedikit peran dan memberi dampak dan kehilangan orang-orang yang kita cintai. Tragedy 26 desember 2004 telah memakan korban sebanyak 250.000 jiwa, dimana disitu terdapat sanak saudara kita yang menjadi korban.

Saat membangun Aceh lebih baik, tsunami yg terjadi dilingkungan kita, telah meniggalkan kenangan-kenangan yang sangat tragis, dan ini saat nya kita membangun kembali, kita tidak perlu terlalu lama dalam ketepurukan.

Bencana tsunami harus bisa diubah misalnya dari musibah menjadi salah satu aspek pariwisata. Tetapi perlu diingat disini kita tidak menjual hal-hal kesedihan terhadap pariwisata tetapi mengambil hal positifnya saja dan membangun pencitraan menjadi sangat penting.

Aceh dan khususnya Banda Aceh menjadi tempat terinspirasi masyarakat di berbagai penjuru dunia untuk berkunjung disini. Ada beberapa menjadi unggulan tsunami, dan smong menjadi keunggulan di seumelue dan kita mmliki museum aceh menjadi symbol dan ikon pariwisata tsunami kedepan. Kami berharap pemerintah dalam forum kemasyarakat untuk menjadikan museum tsunami menjadi aktif dijendela dunia misalnya dalam sitem internet.

Diharapkan masyarakat selalu belajar dengan bencana yang ada. Masyarakat melalui cerita rakyat tsunami, dengan beberapa monument, kuburan massal menjadi objek pariwisata.

Tragedi meninggalkan kenangan pahit. Disini kita bagaimana menjadikan tsunami kedepannya menjadi kenangan yang tak mungkin dilupakan. Dan yang paling penting menyatukan masyarakat supaya mereka menjadi media efektif dengan tsunami-tsunami yang terjadi.

Kedepannya kami harapkan museum aceh menjadi museum nasional, kami akan mnjadi mitra bapak-bapak. Bagaimana kita menjalin hubungan kerja sama dengan baik.

Presentasi 4: Pariwisata dan Bencana Alam di Indonesia: Sebagai Kebijakan Rehabilitasi Sosial

Pembicara: Dr. Satoko HAMAMOTO, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Saya tarik pariwisata di daerah bencana. Dapat dimanfaatkan untuk rehabilitasi sosial-ekonomi. Dapat diterapkan pembangunan Desa Wisata.

Tinjauan potensi rehabilitasi bencana alam dengan memanfaatkan kepariwisataan. Apa sisi positif kepariwisataan sebagai cara rehab sosial-ekonomi pasca bencana, Korban sendiri juga terlibat.

Mbah Marijan = juru kunci, pengawas pada Mei 2006 Letusan Gn. Merapi Dusun Kinahrejo diselamatkan. Saktinya terkabul. Lau, Okt 2010 Letusan Gn. Merapi Tewas dengan awan panas. Bekas rumah: dimuseumkan sebagai peringatan bencana. Rumah Dome = keunikan bentuk shelternya Bantuan dari luar negeri, tidak menyesuaikan budaya Jawa. Namun, daya tarik pariwisatanya menonjol berhasil sebagai Desa Wisata.

Simbol, dapat dimanfaatkan sebagai daya tarik pariwisata, Perasaan berbagi simbol membantu rekonstruksi komunitas baru. Apa arti pengalaman bencana Bukan hanya percobaan dari Tuhan. Semacam berkah, banyak perhatian/peduli/kasih, Kedatangan penonton juga kesempatan jual-jualan souvenir. Jangan terlalu merasa kecewa/putus asa.

Daya tarik pariwisata di daerah korban, Mungkin juga, keingintahuan saja. Namun, bisa menggunakan/memanfaatkan/melibatkan itu sebagai salah satu kekuasaan untuk rehabilitasi sosial-ekonomi dengan pariwisata. Pariwisata : kesempatan mendapat ilmu pengetahuan yang baru. Penonton pun pasti dapat kesan-kesan yang tertuntun mengenai pengalaman bencana alam. Kesempatan mendapat ilmu pengetahuan penanggulangan bencana dan proses rehabilitasi. Terima Kasih

TANYA JAWAB

Miswan (Dinas Pertambangan dan Energy): Untuk Husaini, Bagi mereka yang tidak mendapatkan pendidikan mungkin mereka tidak termasuk dalam program ini, melihat hasil presentasi bapak.

Untuk Rahmadhani, Bagaimana banyak museum di Jepang masyarakat di Jepang, bagaimana status museum tsunami kita ini, kenapa bukan pihak PEMDA yang mengelolanya?

Untuk Hamamoto, Bagaimana peningkatan ekonomi di Jawa, mengapa mereka cepat sekali bangkit?

Husaini: Telah diadakan simulasi kepada mereka dalam kegiatan pembelajaran di sekolah sebelum, saat, dan setelah terjadinya bencana sesuai dengan daerah mereka masing-masing. Bagi mereka yang tidak bersekolah. Saat ini ada pengelolaan studi manajemen, apabila masyarakat terlibat dalam pendidikan, maka orang tua tentu ikut berpartisipasi

Rahmadhani: Untuk museum tsunami yang kita tahu menjadi kebanggaan masyarakat Aceh sekaligus Internasional, sampai saat ini kita telah melakukan perbaikan-perbaikan. Pemerintah Aceh bertanggung jawab dalam operasional museum ini. Dan kita terus mengembangkan sumber daya manusia kepada masyarakat Aceh. Perlu adanya kesiapan bagi permasalahan global.

Hamamoto: saya pikir, saya perlu mengadakan penelitian lebih lanjut dan itu sudah cukup bagus pertanyaannya, karena saya disini hanya antropologi saja, dimana hanya melihat perkembangan sejarah-sejarah di Jawa

Tanya: Kepada Ibu Hamamoto Satoko, mengapa bisa orang Aceh menjual, melaunching penderitaan pasca tsunami. Bagaimana menurut pandangan ibu?

Jawab: Hamamoto: Saya pikir orang Aceh jual bencana itu tidak. saya pikir ini merupakan proses berbagi pengalaman tentang bencana alam. Jadi ini hanya tentang bagaimana berbagi pengalaman-pengalaman bencana alam sehingga masyarakat dunia lain tertarik untuk melihat langsung.

Sesi Permulaan: Pengelolaan Informasi pada Masa Kini

Kata Sambutan Adnan Beuransyah, Ketua Komisi A, Dewan Perwakilan Rakyat Aceh

Salam pembuka, Kami sangat terbuka dan mendukung setiap program internasional di Aceh dapat berhasil dan memberikan manfaat semaksimal mungkin, bukan hanya masyarakat Aceh tetapi masyarakat dunia. Tentu nya informasi tentang bencana sudah dikelola dengan baik, juga bisa berbagi manfaat kepada investor-investor lainnya. Karena dilain pihak Aceh sangat kaya akan sumber daya alam nya. Dilain pihak kami ingin memiliki fungsi bugetin serta mengharapkan pemerintahan Aceh dapat mengalokasikan dana lebih ditingkatkan untuk tahun 2012 nanti. Akhirnya kami mengharapkan organisasi internasional yang dilaksanakan pada hari ini dan terlaksana atas bantuan pemerintahan Jepang, kepada Kyoto University dan pihak lainnya dapat berjalan dengan lancar dan kami yakin, banyak manfaat yang bisa di ambil dari symposium ini.

Presentasi 1: Area informatics pada masa kini: Cabaran pembuatan dan penggunaan database

Pembicara: Prof. Dr. Shoichiro HARA, CIAS, Kyoto University

Kata sambutan, ahli bidang area informatics. Didunia banyak berbagai database, kalau ini tentang peta, peta sejak dalam masa kuno dalam tulisan jawi dari majalah-majalah di Malaysia, database tentang film India, gambar yang diambil dari peneliti Thailand, informasi tentang pemilihan umum, di Eropa timur, karena lembaga CIAS memfokus seluruh wilayah diseluruh dunia. walaupun kelihatannya berbeda-beda tetapi ada konsep kalau dokumen-dokumen yang dijadikan database. Naskah bencana alam dalam naskah tersebut terdapat dari catatan dijadikan database. Setelah membuat database di tentukan dipeta bisa melihat berapa ukuran gempa, tempat lokasi, jadi informasi diambil dalam naskah dikembangkan dalam peta dan mengetahui lokasi-lokasi gempa di masa lalu tapi ini hanya memperkenalkan saja dan kembali ke database tema utama kali ini membuat database secara dasar, perlu beberapa minggu untuk mengumpulkan data nya secara lengkap. hari ini hanya ingin memperkenalkannya karena ini terkait bencana alam.

Sebelum membuat database info mentah dan diberi indeks masing-masing, baik nyata baiknya database tergantung dari indeks, digitalisasi ada poin jika salah menggunakan nanti bisa salah munculnya. Sekarang sudah proporsikan gambar yg diambil mungkin dalam bentuk GPS, kalau ambil foto dalam bentuk JPEG ada batas info untuk melihat hasil gambar, tidak ada masalah jika mengambil untuk 10 tahun lagi terjadi masalah berarti dimana harus dimanfaatkan itu harus dipikirkan berbeda-beda bagaimana cara memperindeks itu sangat penting dalam membuat database.

metadata kesimpulan info, misal ada botol aqua kami bisa meminum aqua dengan adanya label jadi bisa minum aqua. Kalau melihat botol dengan ini tanpa label, bagaimana bapak-bapak bisa mau minum tanpa label orang tidak bersedia minum isi dalam botol. catatan seperti itu diatas label, inilah, metadata yang kami tunjuk. Model sangat populer dalam bidang arialmatik kalau membayangkan dari area melihat hardware nya apa membuat database melihat lapisan ini catatan melihat tertarik dari penampilan untuk membuat tampilan yang bagus.

Database yang memanfaatkan database adalah kita sekarang penggunaan database komputer, kalau dulu manusia memanfaatkan database, tapi sekarang komputer kalau kita dapat membaca-membaca tulisan tapi komputer tidak bisa membaca kalimat hanya melihat eja-ejaannya.

Ada tahap 1,2, dan 3. Dalam tahap 2 dalam database harus dapat dipahami oleh komputer bukan manusia. Jika no 1 untuk jenis kelamin menggunakan standar dunia mungkin dalam gempa tsunami dalam proses kontruksi menggunakan database dan bentuk formal berbeda-beda tapi itu bearti database-database yang lainnya bagaimana memanfaatkan database yang sudah dibuat.

Gambar ini untuk mempersatukan database-database yang sudah dibuat. Database untuk jenis kelamin. Database menggunakan dalam bahasa Jepang dan SEX dalam bahasa Inggris. kalau

dimasukan kata sex dalam sistem komputer dapat mencari dalam database itu dalam jenis kelamin kalau komputer dapat menyadari satu-satu kata itu dalam satu fungsi.

Halaman pencarian dalam 32 hal database, jika dimasukan kata akan ada muncul film dan peta. Jika di Aceh berbagai database yang sudah dibuat dan di berbagai website bisa dimanfaatkan. Apa yang diharapkan trend area informatics perkembangannya cepat sekali.

Dalam area informatics sudah ada standar metadata bisa dikatakan data indeks standar kalau memanfaatkan database bisa digunakan database dengan menggunakan data indeks standar. Dalam memperkenalkan dasar indeks standar, ada beberapa indeks untuk melihat yang lain dengan menggunakan kata lain database-database dunia bisa digunakan dalam site mini jadi dengan menggunakan dasar indeks standar bisa dihubungkan dengan database yang lain. Keadaan banyak record yang ditimbulkan melalui sistem tadi jadi database-database yang disimpan di Aceh di renovasi berdasarkan database disambungkan dengan database yang lain didunia. TerimaKasih.

Presentasi 2: Diseminasi Informasi tentang Pengurangan Risiko Bencana (PRB)

Pembicara: Marwan Nusuf Ilyas, Dinas Perhubungan, Komunikasi, Informasi dan Telematika, Provinsi Aceh

Kata sambutan, Aceh merupakan wilayah yang rawan bencana, masyarakat perlu mendapatkan pengetahuan tentang hal tersebut. Dalam rangka menyebarkan informasi tentang PRB kepada berbagai stakeholders, DISHUBKOMINTEL Aceh bekerjasama dengan DRR-A UNDP telah mencetuskan pembentukan suatu forum Komite Kordinasi Penyadaran Publik (KKPP) atau Public Awareness Coordination Commite (PACC) untuk pengurangan risiko bencana.

Mengembangkan kegiatan-kegiatan penyebarluasan informasi dalam upaya pembentukan kesadaran masyarakat tentang pengurangan risiko bencana, baik melalui media cetak maupun media elektronik. Kegiatan diseminasi informasi ini terus berjalan sehingga dapat mendorong pihak terkait untuk lebih memberikan perhatian terhadap pengurangan risiko bencana.

Pembentukan Komite Kordinasi Penyadaran Publik (KKPP) atau Public Awareness Coordination Commite (PACC) yang terdiri dari perwakilan dinas-dinas terkait, kalangan media dan unsur terkait lainnya. mengadakan rapat-rapat, training dan workshop tentang pengurangan risiko bencana. Penyebarluasan informasi kepada masyarakat tentang pengurangan risiko bencana melalui talk-show TV, advetorial surat kabar, PSA radio dan acara pertunjukan rakyat.

Dinamika pelaksanaan kegiatan, dimana penyesuaian waktu antar instansi, ada kegiatan yang harus dilakukan secara mendadak, komitmen dan koordinasi dengan lembaga-lembaga yang terkait kegiatan PRB Belum kuatnya sinkronisasi kegiatan PRB, Belum adanya anggaran khusus pemerintah untuk kegiatan informasi publik tentang PRB, Belum adanya inisiatif kalangan swasta dan media lokal untuk menjadi sponsor program-program informasi publik, Kondisi keamanan di daerah, terutama sehubungan dengan pelaksanaan pertunjukan rakyat/ kegiatan di keramaian.

Pembelajarannya Perlu kesabaran dalam bekerjasama dengan lembaga lain, Perlu keberlanjutan program, Perlu advokasi tentang pentingnya PRB kepada sesama lembaga pemerintah, dewan perwakilan rakyat, kalangan swasta, dan media, keberlanjutan (sustainable) dalam melakukan sesuatu pekerjaan.

Rencananya Komitmen ke depan adalah memasukkan informasi tentang pengurangan risiko bencana ke dalam kegiatan di lembaga kami selaku penyebar informasi publik, sehingga kegiatan ini akan berjalan secara terus-menerus, karena diseminasi informasi ini senantiasa dibutuhkan oleh masyarakat tanpa mengenal batas waktu dan usia.

TANYA JAWAB

Wahyuni (prodi ekonomi): Kenapa pemerintah memberikan ijin untuk pihak-pihak tertentu dalam penembangan pohon sehingga terjadi banjir dikota Tangse?

Adnan: setelah naik gebener yaitu pada masa pemerintahan Irwandi, telah mengeluarkan larangan illegal logging, kayu-kayu yang di Aceh ini dilarang diterbang, namun ada pihak-pihak yang sengaja sehingga terjadi malapetaka bencana tersebut di Tangse. Yang jelas kami tidak tahu siapa yang melakukannya, tetapi itu tidak lebih untuk mencari sesuap nasi. Pada masa pemerintahan Soeharto telah member ijin kepada pihak-pihak tertentu untuk menembang pohon. Suatu hal yg ironis, banyak bantuan yang diterima LSM, Walhi, dan lain - lain dengan menjual hutan Aceh demi kepetingan mereka, tapi mereka tidak memberdayakan masyarakat setempat, oleh karena itu dalam kedepan kami mencoba bagi siapa pun yang berkepetingan dengan hutan di Aceh, wajib mendirikan kantornya di Aceh.

Aulia (Flamboyant): kepada bapak Marwan, sudah ada survey tentang gambaran masyarakat kita tetap siaga dalam bencana, bagaimana mengukur efektivitasnya?

Marwan: Dalam menggunakan program-program di TV misalnya dalam talkshow-talkshow. Nah, disini kami melihat antusias warga dalam kesiagapan bencana ini. Sosialisasi dari UNDP sendiri dalam bidang komunikasi disini sudah sangat konsen dalam menyediakan ruang. Jawaban konkritnya tidak ada namun kami selaku penyebar informasi pada public saja dan menurut kami selama ini sudah semaksimal mungkin.

Dirhamsyah: Pengalaman rakyat Aceh menjadi partner pihak Jepang saya pikir ini harus dipertahankan baik dalam rangka mitigasi maupun dalam ekosistem.

Meidar (Prodi kimia, USK): Kami tertarik tentang database, kami belajar kimia lingkungan dan banyak kami dapatkan bahan-bahan materi tentang bahan pencemar. Jika kami ingin membuat suatu database tentang bahan pencemar untuk skripsi dan tugas akhir. Mungkin bapak Hara Shoichiro dapat membantu kami?

Hara: Mungkin dalam ilmu pengetahuan tentang kimia lingkungan itu, mungkin tidak ada jawabannya, tetapi bisa mencari metadata terkait dengan kimia lingkungan.

Wildan (S2 kebencanaan): Bagus sekali membangun database diseluruh dunia, bagaiman cara kita melewati kendala ini sehingga database diseluruh dunia dapat disatukan?

Hara: Telah tersebar, database yang telah dibukakan, informasi yg di muat di database. yang terpenting itu database yang digunakan misalnya menggunakan google semua informasi dapat dicari dan bisa di akses di internet itu sangat penting untuk perkembangan dan pemasukan database diseluruh dunia

Kuliah I: Database untuk Pembangunan Daerah

Presentasi I: Sistem Pemetaan Informasi Bencana untuk Memahami Keadaan Sosial Pembicara: Dr. Hiroyuki Yamamoto, CIAS, Kyoto University

Dalam tiga hari kami ingin memapari tentang area informatics. batas teknologi dimanfaatkan sebaiknya dalam area informatics tersebut. Sebelumnya ingin memperkenalkan staf-staf kami yang dapat menggunakan bahasa Indonesia. Kami menghubungkan informasi menggunakan peta hasil, Artikel kata gempa dan bencana ada di artikel setelah masukan kota bisa melihat langsung masukan ke exel. Untuk mencari lokasi artikel kami ada membuat daftar nama tempat untuk Banda Aceh dan disini kami bekerja secara keras kami cari dalam peta masing-masing.

Ada daftar nama tempat sekaligus di komputer, mohon menyusun dan menyerahkan kepada masyarakat umum, misalnya kantor kecamatan mereka hanya mencari saja beberapa desa. Masing-masing kantor kecamatan mereka bisa ambil datanya tentang desa mereka. Jadi itu sangat gampang Kami mengharapkan kepada masyarakat untuk membuat dengan bagus. kami pikir PEMDA harus bekerja keras dalam hal ini dan dihubungkan diseluruh dunia.

Kami bisa membaca artikel ini satu persatu tapi itu juga memakan waktu yang lama, kami sarankan pihak media cetak mengeluarkan indek. Kami sangat berharap media massa memiliki online news memberikan informasi diatas website.

Kalau sudah tiga item peta, nama, tempat, kalau sudah ada tiga item tersebut bisa dikembangkan itu

bukan hanya sosial saja tetapi bisa dimanfaatkan ada konflik misalnya jadi dengan konsep ini dapat diberitakan dengan segala tujuan. Kami mengajak para hadirin mengikuti pelajaran kami selanjutnya. Terimakasih.

Presentasi 2: Pembinaan Sistem Informasi untuk Penanggulangan Risiko Bencana

Pembicara: Dr. Nasaruddin, TDMRC, Universitas Syiah Kuala

Salam, pembuka, kita disini lebih menampilkan prosesnya yaitu langkah-langkah pembuatan itemnya. Salah satu produk dari TDMRC. setelah tahun tragedy 2004 di Aceh masih ada banyak bencana, bukan hanya bencana gempa dan tsunami saja bahkan banjir dan lain-lain dan ini semua data yang kami dapatkan dari DIBA dan ini merupakan salah satu produk dari TDMRC.

Tujuannya kita akan membangun mejadi salah satu tool dan kesiagapan dari masyarakat dan nanti banyak informasi bencana dikumpulkan dalam program ini. Yang selanjutnya kita melihat apa itu resiko bencana bisa menampilkan ada peta ancaman, ada peta bencana, ada peta resiko dan disamping itu kita gunakan sebagai monitoring sekaligus penanggulangan resiko kebencanaan.

Bagaimana membuat peta resiko, ada lapisan ancaman nya nanti akan mendapatkan peta resikonya.

Ilustrasi dari database dimana data yang ditampilkan dari data penelitian kita sebagai database kita masukan data-data nya dan bisa diakses secara public.

Sederhananya kita punya data dari berbagai data yang ada jadi kita bisa memilih lokasi mana yang diinginkan. Prinsipnya punya data dan punya system dan masyarakat bisa mengakses data tersebut.

Kami telah melakukan imitigasi dari level nasional artinya ini dapat menjadi kajian teknologi, kita sudah lakukan di DIKTI dan sebagainya dan ini menjadi kajian geologi. Kemudian langkah kedua bisa kita gunakan untuk mendapat kebutuhan kami telah melakukan workshop. Langkah ketiga untuk mendapatkan feedback pula dari pengguna tadi. Januari kita akan mengimplementasikan bisa untuk update data dan bisa di update data nya secara local.

Disini ada dua produk ADRM and DRMIS. ADRM secara off-line dan DRMIS secara on-line. Jadi disini dalam bentuk kertas dan buku masing-masing punya database. Contoh untuk peta ancaman gempa, Hazardmap untuk level provinsi, kerentanan peta resikonya gempa bumi kemudian contoh yang lain adalah banjir karena banjir sering sekali terjadi di aceh.

Kuliah 2: Penerapan Informasi Geografi dalam Ilmu Sosial dan Budaya

Presentasi 1: Pemetaan Praktek Agama: Candi dan Imam Budha Theravada

Pembicara: Prof. Dr. Yukio Hayashi, CIAS, Kyoto University

Hari ini kami memaparkan hasil penelitian di lapangan dan dimasukan dalam database. Memfokuskan penelitian ini dengan orang Thailand. Yang pertama dengan Thailand untuk penelitian dilapangan inilah kawasan Thailand, Laos, Myanmar.

Untuk memikirkan negara Kamboja kami tidak bisa melupakan pemerintahan Propoto sejak tahun 1976-1979 mereka memberantas kaum budis-budis di Thailand. Pada dasar itu ahli agama budis keluar dari vihara, sedangkan vihara-vihara dirobohkan dengan sengaja. Pada masa itu wilayah tertutup. Pada tahun 1994 boleh orang luar masuk pasca konflik untuk mencari data-data tetapi tidak bisa ditemukan. Mengunjungi pemerintah pusat dan daerah tapi tidak ada sama sekali data, sehingga mau tidak mau untuk mencari data ini sendiri.

Pada masa itu tidak ada pelayanan google jadi tidak ada peta-peta tersebut, jadi tidak bisa menemukan lokasinya. Namun peta dapat diperoleh dipasar-pasar kemudian tentara-tentara menggunakan peta tersebut pada saat perang. Saya menjadikan peta tersebut dengan membuat peta berjalan dilapangan dengan peta tersebut saya menemukan titik-titik itu dilokasinya. Karena waktu itu tidak ada GPS saya menggunakan kompas dilihat jaraknya dengan waktu. Kenapa ahli agama budis, kalau di Aceh

sama saja dengan mesjid dan ulama-ulama yang sangat berperan dimasyarakat.

Dalam kesempatan ini saya ingin mengenalkan jadi beliau meneliti agama budis pada pasca konflik, informasi daerah tersebut tidak ada dan pecah sekarang saya memiliki 9 titik dari penelitian. saya mengunjungi seluruh agamanya budis diseluruh wilayah. Informasi terkait dengan sarana tersebut muncul. Kalau di masyarakat budis fungsi sarana agama penting sekali dimasing-masing daerah. Jadi sarana agama tidak hanya dalam bidang agama tetapi pertanian dan informasi terkait. Untuk mencari informasi tentang agama budis itu tidak gampang.

Daftar itu masing-masing sarana agama itu, kapan keluar, kapan pindah, itu informasi tentang agama budis ini bisa dijadikan study banding, fungsi agama budha pun berbeda pada masing-masing negara dengan menggunakan peta dan system tersebut kami bisa. Sistem ini bisa dimanfaatkan oleh agama lain, info ulama dan mesjid bisa dimasukkan dalam site mini item ini sangat sederhana walaupun bdnnya lain. Dalam proses mengumpulkan data-data dimasukkan database-database lainnya. Kalau sistem ini sendiri ada trendnya mungkin lewat dari 5 tahun system itu telah berubah. System yang tadi saya paparkan itu melihat kecantikan penampilan tetapi tidak perlu itu yang penting bagaimana system itu bisa teratur dan yang terakhir saya tambahkan hak cipta soal itu sama dengan system. Mungkin dengan kerjasama diberbagai perguruan tinggi mungkin tidak terlalu sukar. Terimakasih.

Presentasi 2: Membangun Rintisan Sekolah Siaga Bencana

Pembicara: Dr. Muhammad Ridha, TDMRC, Universitas Syiah Kuala

Salam pembuka, sekolah siaga bencana adalah sekolah yang mampu mengoptimalkan pengetahuan dan sikap, membangun rencana tanggap darurat dan sistem peringatan bencana, serta mengerahkan segenap sumber daya yang dimiliki, yang keseluruhan upaya tersebut didukung oleh kebijakan sekolah.

Parameter komunitas sekolah, jadi ada siswa, guru, lembaga sekolah lalu ada pengetahuan sikap, kebijakan. Tanggapan darurat, sistem peringatan dini, mobilitas sumber daya. Apa yang dilakukan sekolah disini melihat pengetahuan dan sikap misalnya Integrasi pengetahuan bencana kedalam kegiatan belajar mengajar, Sosialisasi /Pelatihan, Pembuatan ornament sekolah, Pengembangan diri, Event tahunan.

Kebijakan disini Melegalformalkan dalam bentuk SK/Kebijakan, Pengintegrasian kebencanaan ke dalam KBM, Latihan/simulasi evakuasi secara reguler, Gugus siaga bencana, Alokasi dana untuk kegiatan kesiapsiagaan. Rencana tanggap darurat disini Membuat salinan/duplikat dokumen penting, Membentuk kelompok peringatan bencana, Menentukan tempat evakuasi, Membuat jalur evakuasi, Membuat prosedur tetap evakuasi, Latihan simulasi evakuasi secara reguler.

Sistem peringatan dini Menyiapkan alat dan tanda bahaya, Sosialisasi tanda bahaya, Membentuk kelompok peringatan bencana, Mengakses informasi peringatan bencana kepada pihak berwenang. Mobilisasi sumberdaya disini Mobilisasi kelompok siaga bencana, Pemenuhan kebutuhan dasar paska bencana, Pemantauan dan evaluasi kesiapsiagaan sekolah, Pengembangan kerjasama dengan stakeholder.

Tahap membangun sekolah siaga bencana pengembangan mandiri oleh sekolah lalu ada tahap inisiasi, monitoring dan evaluasi lalu menjadi sekolah rintisan siaga bencana.

Pada tahun 2011-2012 ada 28 model sekolah siaga bencana di propinsi Aceh. Jadi ada beberapa disini sekolah siaga bencana binaan TDMRC. Terima Kasih

Presentasi 3: Sistem dan Standar Data UPTD-PDGA Bappeda Aceh

Pembicara: Nanda Maulina, Pusat Data Geospasial Aceh (PDGA), Bappeda Aceh

Salam pembuka, yaitu system yang kita pakai adalah Infrastruktur data spasial adalah Suatu sistem penyelenggaraan pengelolaan data spasial secara bersama, tertib, terukur, terintegrasi dan berkesinambungan, serta berdaya guna.

Jadi kondisi data yang ada di Aceh awalnya tidak terlalu lengkap dan teratur jadi user sulit dalam hal ini yaitu proses yang kita inginkan adalah yang ideal yaitu terstruktur dengan baik. Data spasial setiap data menggunakan suatu base yang sama, terkait penyusunan tema kita berusaha menyusun dalam standarisasi data dan terdiri dari 21 tema dan mengadopsi dari standar ISO

Teknik yang digunakan, sosialisasi standar tentang pengumpulan dan pemeliharaan data, penetapan dan pemberdayaan Wali Data, Pengembangan dan pelaksanaan prosedur kepastian kualitas Penyempurnaan fundamental dataset.

Lalu metadata Belum tersedianya informasi yang menjelaskan kondisi suatu data spasial (metadata), sehingga menimbulkan keraguan atas kebenaran informasi yang terkandung didalamnya yang berujung pada keraguan untuk memanfaatkan data spasial itu sendiri.

Lalu alur kerja disini kita pengambilan data, penyimpanan dan pengolahan, manipulasi dan analisa dan penayangan data. Ada bentuk simple struktur server PDGA Bisa di akses pada www.gdc.acehprov.co.id untuk melihat data-data parsial.

Presentasi 4: Data dan Informasi Bencana Aceh (DIBA)

Pembicara: Irma setywati, TDMRC, Universitas Syiah Kuala

Salam pembuka, DiBA merupakan sistem database online yang berisi history data bencana di Aceh. disitu terdapat apa, dimana, berapa korban semua ada disitu dan memiliki data tersebut dari 1975 – sekarang. DIBA merupakan integrasi dari DIBI itu adalah kontes nasional sedangkan DIBA khusus untuk daerah Aceh. Dengan demikian diharapkan datanya itu lebih detail dari tingkat provinsi sampai tingkat kecamatan. Kemudian DIBA ini menggunakan system pemetaan.

DIBA sudah dapat diakses secara online www.diba.acehprov.go.id. Disini kita ada admin merekrut data dan sudah dilakukan dan kapasitas development, jadi memang DIBA saat ini masih dikelola oleh TDRMC untuk itu semua data DIBA ada di BPBA. Peran DIBA untuk mengumpulkan dan menganalisa data kemudian bisa digunakan sebagai pengetahuan oleh masyarakat. Penting nya DIBA diharapkan bisa ada pengumpulan bisa dilihat dengan baik. Berikut ada salah satu contoh distribusi bencana yang di Aceh, jadi ada data-data yang ada di DIBA bisa di integrasi disini. Jadi daerah yang warna yang lebih tebal menunjukkan bencana yang lebih tinggi. Lalu ada kategori bencana yang paling tinggi banjir kemudian ada kebakaran. Ada grafik tahun 2001-2010 meningkat bencana yaitu yang paling tinggi tahun 2009. Jadi dari DIBA sendiri mengharapkan dari pemerintah dapat menyusun perencanaan pembangunan lebih baik. TerimaKasih.

TANYA JAWAB

Julien: kenapa tahun 2011 makin banyak apakah sudah disosialisasikan?

Jawab: Untuk data clering lebih banyak bicara dalam data parsial dan disini ditampung clearing data. Dan disini kita menggunakan tahapan-tahapan, memakai tiga fase. Melakukan cek ulang data yang kita punya mengacu pada base data akurat yang valid dipakai sehingga hasilnya itu adalah data yang terbaik yang kita punya ke website yang. Data parsial menggunakan system manual. Bukan hanya 2011 tetapi 2009 juga jadi disini memang dampaknya yang tinggi

Firdaus (makasar) : Dalam sekolah siaga bencana. dari segi kurikulum apakah merupakan kurikulum terintegrasi, dalam penangan nya apakah diberikan pelatihan khusus atau workshop?

Ridha: Beban anak-anak kita sudah berat sehingga tugas kita telah memberikan pelatihan yang ada. Sejauh mana, bagaimana menyiapkan sekolah supaya siaga, kemudian mendorong sekolah tersebut. TDMRC selalu siap biasanya mereka meminta narasumber, dimana kita memberi reward kepada mereka dengan mengadakan simulasi-simulasi di setiap sekolah.

Sesi Komentor dan Diskusi

Presentasi 1: Kebijakan Editorial Kompas dan Kompas.com

Pembicara: Pepih Nugraha, Kompas Media Nusantara

Salam pembuka, Kompas menjadi surat kabar terbesar di Indonesia. Peran Kompas yaitu Kompas.com memanfaatkan dan mendukung edisi Kompas Cetak.

Strategi perusahaan Kompas yaitu ; manify Corong pembesaran “suara” dan pengaruh Kompas Cetak di Internet, Contoh: isu yang sedang digarap Kompas Cetak dilanjutkan (follow up) dan diperbarui (up date) oleh Kompas.com. Completion yaitu Penyambung dan pelengkap isu/topik Kompas Cetak yang diprediksi akan berkembang dan ramai dibicarakan. Contoh opini Kolonel Adjie di halaman Opini Kompas (6 September 2010) yang ramai di Twitter, tetapi saat dibuat berita di Kompas.com juga dibaca banyak orang. Observer yaitu Mengamati perbincangan/isu di Internet secara real time, Contoh kicauan mantan petinggi AU RI tentang keterlambatan Garuda 20 menit gara-gara menunggu anak SBY. Presenter yaitu Memuat kembali artikel Kompas Cetak yang ramai/ menarik pada waktu akses internet tinggi, Contoh pada jam-jam 11.00-13.00 atau 17.00-19.00.

Kemudian ada orientasi pembaca dimana disini Mengamati percakapan di internet yang memungkinkan adanya prediksi pengembangan topik yang potensial dan relevan, Prediksi adalah awal terciptanya kecepatan, Alat terbaik untuk mengamati dan memprediksi adalah Twitter. Contoh: gempa di China yang dilaporkan warga dan dilansir BBC, juga bom JW Marriott dan Ritz Carlton di Jakarta, Twitter bukan pilihan melainkan kewajiban.

Karakteristik di Kompas yaitu ;

- INSTAN - terbit cepat, anytime, anywhere, real time
- UNLIMITED SPACE. Kita bisa menulis sepanjang-panjangnya tanpa batasan halaman seperti yang terjadi pada cetak.
- LINKS. memungkinkan berita tersambung satu sama lain, tidak berdiri tunggal seperti dicetak. Dengan LINKS berita menjadi komprehensif.
- TERARSIPKAN. Berita-berita yang sudah terbit bisa dilihat lagi. Cuma online yang punya ini. Bisa bangun database. Bisa menyambungkan berita hari ini dengan hari-hari kemarin.
- MULTIMEDIA. text+foto+audio+video+flash. Bandingkan – CETAK hanya text dan foto. RADIO hanya audio. TELEVISI hanya VIDEO.
- INTERAKTIF – memungkinkan terjadi dialog dengan pembaca. Dengan ini kita bisa tahu langsung bagaimana respon pembaca terhadap berita-berita yang ditampilkan.
- PARTISIPATIF – pembaca ikut berkontribusi dalam berita, entah lewat komentar, opini, tambahan informasi
- USER GENERATED CONTENT – ruang kontribusi pembaca 100 persen.

Konten liputan khusus Kompas.com Terkait bencana Tsunami Jepang, Kompas.com membuat banner dan liputan khusus mengenai bencana tersebut selama kurang lebih dua minggu, Menjadi bagian dari “Triple M” dalam liputan tematis besar Ring of Fire (Cincin Api). Kompas cetak yaitu Terkait Bencana Tsunami di Aceh, Kompas Cetak membentuk tim dengan kekuatan dari berbagai desk, dengan ketua tim (Nugroho F Yudho), dengan output buku, Membuat liputan tematis Ring of Fire (Cincin Api) dengan melibatkan “Triple M” (cetak, online, tv).

Presentasi 2 : Strategi Media dalam Pengurangan Risiko Bencana Aceh

Pembicara: Yarmen Dinamika, Serambi Indonesia

Salam pembuka, Kompas menjadi market leader di Indonesia, kita menjadi pemimpin terbesar di Aceh. Strategi media dalam pengurangan resiko bencana di Aceh. Keuntungan Kompas untuk Serambi, yaitu pada waktu bencana alam 2004, Serambi belum bisa terbit tapi Kompas membantu dan member informasi bencana alam di Aceh.

Tidak ada satu bangsa pun di dunia ini yang ditakdirkan hidup berdampingan terus-menerus dengan segala macam marabahaya, kecuali bangsa Indonesia. Bangsa ini dikagumi, sekaligus diprihatini oleh bangsa lain, karena selalu hidup bersama bencana sejak dulu kala. Berdasarkan peta sejarah kegempaan yang dimiliki BMKG Indonesia, kecuali Kalimantan yang relatif stabil dari dinamika kegempaan, ternyata tidak ada wilayah Indonesia yang sepi dari gempa bumi. Itu karena, garis pesisir Indonesia, mulai dari Aceh hingga Papua, berada di atas cincin api (ring fire).

Aceh sebagai bagian Pulau Sumatera, tergolong kawasan yang rawan gempa dan tsunami, karena merupakan daerah pertemuan tiga lempeng patahan gempa (triple junction plate convergence), yakni Lempeng Samudra Pasifik, Eurasia, dan Indo-Australia. Secara metafora dapat digambarkan, air dan bumi tempat kita berpijak di Aceh saat ini ibarat kerupuk di atas bubur panas. Selain bisa terus mengambang dan terombang-ambing, suatu saat juga bisa amblas, terserap ke perut bumi.

Selain memiliki potensi gempa tektonik “perkasa” 8,9 sampai 9,3 SR, seperti terjadi pada 26 Desember 2004 yang memicu tsunami mahadahsyat, kekerapan terjadinya gempa di Aceh juga mencengangkan. Betapa tidak, dalam tempo 4 hari, tidak jarang 72 kali gempa terjadi di Aceh, meski hanya sebagian kecil yang dirasakan getarannya oleh manusia. (Not: Gempa di bawah 4,0 SR, getarannya hanya tercatat seismograf). Pascagempa 26-12-2004 hingga 31-10-2005 saja, gempa yang terekam di SMG Banda Aceh 8.875 kali; sekitar 300 kali di antaranya dirasakan manusia getarannya.

Ancaman gempa bumi pun masih tetap membayang di Aceh, mengingat provinsi berpenduduk 4,6 juta jiwa ini memiliki 4 gunung berapi yang masih aktif: Seulawah Agam, Puet Sagoe, Jaboi, dan Burni Telong. Di luar itu, para geologis sudah sejak awal 2005 mengingatkan tentang satu hal yang perlu diwaspadai penduduk Sumatera, tak terkecuali Aceh. Bahwa karena daerah di bawah laut Pulau Andalas ini terus mengumpulkan energi pascagempa Aceh, maka suatu saat energi itu tidak bisa ditahan lagi, lalu dilepaskan, sehingga terjadilah gempa besar.

Tapi, gempa yang berpotensi memicu tsunami bukanlah satu-satunya ancaman dari alam di Aceh. Berdasarkan akumulasi bencana yang terjadi di 10 kab/kota di Aceh selama tahun 2009, yang paling dominan koefisien bobot bencananya adalah sbb: (1) banjir: 0,64, (2) gempa: 0,23, (3) tanah longsor: 0,07, (4) gelombang pasang: 0,04, (5) puting beliung: 0,02. (Hasil pemetaan bencana oleh TDMRC). Nah, dlm konteks penentuan strategi media terhadap upaya PRB di Aceh, pengetahuan atau info-info dasar inilah yang harus dimiliki wartawan/pengelola media.

Apa yang dilakukan serambi group adalah Strategi media kami dalam upaya PRB di Aceh adalah: 1) Memberi penyadaran kepada setiap wartawan Serambi Group bahwa Aceh termasuk daerah yang penduduknya ditakdirkan untuk senantiasa hidup berdampingan dengan berbagai marabahaya. 2) Pengetahuan tentang itu harus “ditularkan” kepada seluruh penduduk Aceh melalui pemberitaan dengan strategi: sampaikanlah berita tentang ancaman bencana apa adanya, tapi jangan sampai membuat orang panik. (Jurnalisme bencana jangan terjerumus menjadi bencana jurnalisme).

Konsep produk yaitu content, penulisan, penyajian. Mengemas isu kebencanaan Selain itu, sangatlah penting kesiapan wartawan, baik secara individu maupun tim, dalam mengemas isu dan mendesain liputan yang berdimensi PRB, dengan menguji kelengkapan unsurnya melalui serangkaian pertanyaan.

Karena bencana itu adalah sunatullah, maka bencana sulit dihindari, tapi kerugian akibat bencana bisa dikurangi dan sangat mungkin diminimalisir. Menyiapkan generasi yang tanggap bencana melalui diseminasi informasi, salah satu jawabannya. Ini yang harus kita lakukan melalui pena dan jejaring kita sebagai wartawan. Terima Kasih.

Ceramah Utama I

Presentasi 1: Program Multi-Disiplin dalam Pengurangan Bahaya Gempa Bumi dan Gunung Api di Indonesia

Pembicara: Kiyomi Endo, JICA

Mengucapkan selamat pagi dan terima kasih kepada peserta, panitia dan Dr. Dirhamsyah yang telah melaksanakan workshop sampai hari ini.

Goncangan gempa telah menyebabkan kehilangan harta, jiwa dan benda. berbagai bencana, termasuk banjir yang saat ini sedang melanda Thailand. Indonesia dan Jepang telah mengirimkan bantuan makanan ke sana. Kami harus memikirkan berbagai penanggulangan terhadap bencana ini.

Kami menyadari bahwa Indonesia dan Jepang mengalami banyak kejadian bencana dibandingkan negara lain. Proyek JICA bertujuan mengembangkan penelitian terhadap prediksi gempa dan tsunami yang diperuntukkan untuk kesiapsiagaan bencana alam.

Ada 6 kelompok penelitian JICA:

1. Gempa dan tsunami (ITB dg Univ. Tokyo)
2. Letusan gunungapi (Kyoto University dgn ESDM)
3. Hazard Map dan regulasi (Tohoku Univ dg BPPT)
4. Mitigasi Sosial / Social & Culture (including workshop) (Nagoya Univ, Kyoto Univ dg LIPI – Unsyiah – UGM – UI – ITB)
5. Pendidikan
6. Koordinasi dengan Pemerintah (ADRC – RISTEK)

Proyek JICA sudah dimulai sejak tahun 2009, disusul dengan gempa padang, letusan merapi, dll. dalam tahun ini gempa dan tsunami yang besar di Jepang (Tohoku) telah menghancurkan Jepang, lebih dari 20.000 korban jiwa.

Tanggal 18 Juni, Presiden SBY mengunjungi lokasi tsunami dan memberikan semangat yang besar terhadap rekonstruksi kawasan tersebut. Saya harapkan kelompok ke-4 mitigasi sosial menjadi jembatan kerjasama Indonesia dg Jepang.

Terima kasih.

Presentasi 2: Program Studi Magister Kebencanaan Univeisitas Syiah Kuala dan Peranan Sosialnya

Pembicara: Prof. Dr. Syamsul Rizal, Direktur, Program Pascasarjana, Universitas Syiah Kuala

Keinginan Pascasarjana saat ini adalah menambahkan program studi yang sudah ada menjadi 2 kali lipat di tahun mendatang. sebagaimana prodi lainnya, prodi kebencanaan juga akan dibuat prodi moduler, yang dapat diikuti oleh orang yang sedang bekerja. PNS sangat sulit melanjutkan jenjang pendidikan, sangat sulit meninggalkan pekerjaan (jabatan). Program moduler memberikan solusi terhadap hal tsb.

Program moduler ini merupakan kombinasi antara kuliah jarak jauh dan regular, sehingga mahasiswa/i dapat menyelesaikan kuliah dan pekerjaan sekaligus. Khusus untuk S2 Kebencanaan, sangat penting dikembangkan program moduler mengingat bencana terjadi tidak memandang tempat dan waktu. Diharapkan dengan adanya program moduler ini, para PNS yang menjadi ujung tombak dapat melanjutkan pendidikan oleh dari berbagai pelosok.

Sekiranya tidak dikembangkan program moduler ini, maka mahasiswa/i hanya berasal dari kota/kabupaten. sehingga pengetahuan kebencanaan tidak berkembang mencapai kawasan pelosok.

Contoh: Pusat Pembinaan Keahlian dan Teknik? yang telah berhasil dengan program seperti ini.

TANYA JAWAB

Wildan Seni (mahasiswa/i prodi kebencanaan): Untuk Bapak Kiyomi Endo, seberapa besar ketergantungan Jepang terhadap kebutuhan nuklir setelah terjadinya kebocoran nuklir?

Untuk Bapak Syamsuk Rizal, bagaimana kualitas yang diharapkan dari prodi kebencanaan dibandingkan dengan universitas lainnya?

Endo: Saya sendiri tidak terlalu mengenali sumber daya gas, namun disadari kebutuhan gas Jepang tidaklah cukup, sehingga perlu melakukan kerja sama dengan Indonesia salah satunya. Sebagai informasi, Jepang akan melakukan kerja sama dengan proyek pertambangan gas di Jawa Timur.

Prof. Syamsul Rizal: Di Sumatera, Unsyiah no. 2 setelah Univ. Andalas. Saya optimis kita akan mengalahkan universitas yang ada di Jawa. Kita juga harus melawan dengan melakukan berbagai strategi untuk mendekati diri dengan berbagai sumber informasi dan kota-kota besar, seperti universitas di Malaysia. Karena selama ini yang cepat berkembang adalah wilayah yang berdekatan dengan Jakarta (ibukota).

Yamamoto: Saya sangat berkesan dengan Unsyiah, khususnya mahasiswa/i kebencanaan. tadi saya sempat melihat kuliah di lantai 2, melihat banyak mahasiswa/i yang menanyakan banyak pertanyaan, dialog antara teori dan kenyataan. Bagaimana susunan dosen dalam prodi ini?

Prof. Syamsul Rizal: Prodi Kebencanaan merupakan prodi terbaru, masih sangat banyak trial and errors. Staf pengajar dari berbagai fakultas, dari Teknik, MIPA, Pertanian, Kedokteran, dll. dan direncanakan akan diisi juga oleh dosen dari fakultas luar Aceh, mungkin dapat saja dari bapak/bapak sekalian (Jepang-red).

Dr. Firdaus Daud (Univ. Negeri Makassar), Ketua Pusat Mitigasi Bencana: Apakah symposium/survey terhadap kebencanaan sudah pernah dilakukan di Indonesia bagian timur, jika belum saya kira perlu dikembangkan ke sana.

Endo: Kebetulan workshop ini dilakukan atas kerja sama dengan Unsyiah, saya juga sependapat, bencana dapat terjadi di mana saja dan saya juga berharap akan dilakukan kerja sama di Indonesia bagian timur nantinya.

Kuliah 4&5: Informasi Wilayah tanpa Batas

Presentasi 1: Pemetaan Catatan Lapangan

Pembicara: Dr. Masasuki Yanagisawa, CIAS, Kyoto University

Informasi yang bisa ditambahkan dalam peta adalah berupa informasi bujur dan lintang yang diintegrasikan dalam peta. Informasi seperti berita surat kabar, dokumen statistic, dll dapat diintegrasikan ke dalam peta.

2 kategori yang saya gunakan disini adalah: informasi lokasi yang menyatakan lokasi tertentu dan informasi spasial yang menjelaskan lebih luas.

Di bidang ilmu informatika, analisa spasial sudah diotomatisasikan dengan menggunakan GIS. sedangkan untuk informasi lokasi belum diotomasikan, meskipun sedang dikembangkan ke arah tersebut.

Informasi lokasi dilakukan secara manual. pada hari ini saya akan menjelaskan hal tersebut, bagaimana informasi tersebut dimasukkan ke dalam peta.

Menjelaskan bagaimana menghubungkan catatan peneliti dan foto dengan peta digital (Pemakanan tanah (sejarah tata guna lahan?) di Sumatera Selatan, 2 Oktober 1980). Selengkapnya lihat di slide.

Presentasi 2: Proses Pengurangan Risiko Bencana di Sumatera Barat

Pembicara: Prof. Febrin Anas Ismail, Universitas Andalas

Kondisi Sumatera Barat yang berada pada Pantai Barat dengan peluang terjadinya bencana yang sangat besar. Provinsi Sumbar memiliki 12 kabupaten dengan tingkat bencana yang dibagi ke dalam

3 kategori, yaitu: risiko 1, risiko 2 dan risiko 3.

Potensi gempa dan tsunami di Sumatera Barat saat ini sangat besar menurut peneliti para ahli. Diprediksikan gempa besar akan terjadi dalam tahun-tahun mendatang. Potensi longsor dan letusan gunung api juga sangat besar terjadi.

Langkah mitigasi yang dilakukan adalah dengan memperkecil kerentanan dan meningkatkan kapasitas, karenanya diperlukan peta bahaya, peta kerentanan dan peta kapasitas.

Saat ini sedang dilakukan mikrozonasi di Kota Padang oleh Univ. Kyoto – JICA – xxx? (lihat slide)

Untuk tsunami, muncul berbagai variasi peta sehingga dilakukan konsensus terhadap pemutusan peta yang dipakai. Peta hasil konsensus akan digunakan sebagai peta ancaman. Yang terpenting adalah, adanya regulasi dan peraturan pemerintah terhadap upaya pengurangan risiko bencana.

Menjelaskan beberapa upaya pengurangan risiko bencana yang sedang digalakkan oleh Pemda Sumatera Barat. Selengkapnya lihat slide presentasi.

Presentasi 3: Pengeloraan Sistem Pemetaan Informasi Bencana Alam dan Sosial

Pembicara: Dr. Yoshimi Nishi, CIAS, Kyoto University

Penggunaan Sistem Pemetaan Informasi Bencana Alam dan Sosial

<http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Indonesia/>. di laman ini dapat ditemukan berbagai informasi peta kebencanaan untuk Aceh dan Sumatera Barat dengan tema bencana dan sosial.

Dr. Nishi menjelaskan bagaimana laman tersebut dapat menampilkan berbagai informasi yang dibutuhkan terkait dengan informasi kebencanaan dan sosial. Selengkapnya lihat slide presentasi.

Selanjutnya, Dr. Nishi menjelaskan bagaimana laman tersebut dibuat, termasuk dalam hal penginputan data, dan bagaimana mengkategorikan artikel yang telah berhasil dikumpulkan.

Presentasi 4: Peta Sejarah, Peta Adat dan Peta Psikologi: Pelayanan Informasi dari Pandangan Pengguna

Pembicara: Dr. Mina Hattori, Nagoya University

Saya akan melakukan komentar berdasarkan latar belakang pendidikan saya, yaitu:

1. Bagaimana cara mencari informasi secara teknik

Semasa saya bekerja di Sumatera Barat tahun xxx, saya sangat kesulitan mendapatkan data, namun tadi saya melihat banyaknya ketersediaan data di Sumbar saat ini dalam presentasi Prof. Febrin. Di Indonesia kapasitas internet sangat terbatas, usahakan tidak meng-upload peta dengan kapasitas besar, sehingga susah diunduh. Tidak menggunakan Facebook sebagai tool tampilan peta/data, karena di Jepang Facebook tidak sepopuler di Indonesia.

2. Peta dari segi sejarah

Kesulitan mendapatkan peta, mengingat Indonesia merupakan bekas jajahan Belanda dan Jepang.

3. Peta dari aspek mental

Peta Mental (Mental Map), diperlukan saat mitigasi untuk memperhatikan usia.

Presentasi 5: Pemetaan Bencana di Sulawesi Selatan

Pembicara: Dr. Firdaus Daud, Universitas Makassar

Indonesia mempunyai musim penghujan dan musim kering, sehingga kondisi ini dapat menimbulkan bencana banjir dan kekeringan. Selain itu juga tidak dipungkiri, SulSel berpotensi terhadap bencana tanah longsor. Selanjutnya lihat presentasi.

TANYA JAWAB

Dr. Eldina Fatimah (TDMRC, Unsyiah): Untuk Bapak Fedrin dan Bapak Firdaus, Kriteria risiko I, II dan III, apa kriterianya?

Untuk Firdaus, Peta Risiko Bencana di Sumbar, instansi mana yang bertanggung jawab di sana? Perlu payung hukum, di Aceh sudah punya Qanun, apakah di daerah Bapak sudah punya atau belum? Sudah punya BPBD atau belum?

Untuk Dr. Nishi, Informasi apa yang menarik untuk ditampilkan supaya orang tertarik untuk melihatnya, apakah berdasarkan kejadiannya atau kategori informasinya?

Abdul Muzakir (Bapeda Aceh Besar): Untuk Masasuki Yanagisawa, Apakah tampilan data perubahan tata guna kawasan hutan tadi melibatkan struktur masyarakat, ada konflik yang terjadi sehingga terjadi perpindahan penduduk.

Untuk Prof. Febrin dan Dr. Firdaus, Terkait dengan regulasi, di Aceh belum ada implementasi dari Qanun tersebut, sehingga perlu dipertajam terhadap konflik regulasi. Penanganan bencana adalah multidisiplin instansi, melibatkan banyak instansi.

Untuk Dr. Nishi, Kenapa Kompas yang dijadikan sumber utama, padahal banyak media lain yang memberikan informasi bencana tsunami. Media lokal pun sudah sangat akurat, atau orang-orang di lapangan yang dapat memberikan informasi lebih tepat. Apakah dapat dikonversi sampe ke Kecamatan?

Saifuddin (Ketua Himpunan Mahasiswa Kebencanaan): Kepada Bapak Febrin, Sejauh mana tingkat kesiapan Pemda Sumbar dalam kesiapsiagaan bencana gempa, apakah ada blueprint dan regulasi yang telah dilaksanakan saat ini?

Untuk Dr. Nishi, Untuk konflik sosial, masyarakat Jepang sangat mudah putus asa

Rizalul Akbar (BMKG Banda Aceh): Untuk Dr. Yanagisawa, Saya tertarik dengan perjalanan Prof. Takaya, berapa lama yang diperlukan dalam mengumpulkan data tersebut? Informasi berdasarkan lokasi dan spasial, untuk informasi spasial berarti ruangan, di sini apakah ada pengkategorian sendiri?

Untuk Prof. Febrin, Selain tsunami, Sumbar sangat rawan terhadap banjir, apakah wilayah yang dilalui oleh jalur patahan ada peta untuk risiko bencana? Apa yang dimaksudkan peta mikro dan makro tadi, instansi mana saja yang terlibat di dalamnya?

Dr. Yanagisawa: Di Sumatera Selatan, Prof. Takaya pernah tinggal di sana selama sebulan. Informasi lokasi, berupa titik saja. Sedangkan informasi spasial bisa menjangkau wilayah yang lebih luas seperti kabupaten kecamatan, dll.

Prof. Febrin: Untuk Ibu Eldina Fatimah: Kriteria berdasarkan frekwensi kejadian bencana (dampak dan korban yang ditimbulkan). Sebagai contoh: Tsunami, frekwensinya rendah dan korbannya banyak, sehingga dimasukkan ke dalam kategori 1. Melakukan FGD berkali-kali dalam penyusunan criteria risiko.

Instansi yang bertanggungjawab terhadap peta diserahkan kepada BPBD sesuai dengan UU No. 24/2007. Namun kapasitas mereka sangat terbatas, sehingga masih disupport oleh tenaga ahli yang dibentuk dalam Forum peduli Bencana. Pemerintah setuju saja dengan program yang diusulkan selama anggarannya ada. Ke depan, BPBD diharapkan menjadi ujung tombak dalam upaya PRB. RPB sudah disahkan, yang merupakan hasil dari inisiasi forum tadi. termasuk budget sudah disahkan oleh DRPD.

Untuk Pak Muzakir: Meminta kepada Kab/Kota untuk menyusun RPB-nya masing-masing, jika tidak mampu baru disupport oleh provinsi. ujung tombaknya adalah BPBD.

Rencana PRB ini sangat strategis, termasuk dengan tupoksi masing-masing instansi.

Hingga saat ini setelah bencana 3 tahun di Padang, masih ada rumah yang belum dibangun. ada beberapa kesenjangan/masalah sosial baru yang timbul saat ini. Masyarakat mengharapkan adanya bantuan sehingga nilai gotong royong berkurang.

Kerusakan rumah disebabkan oleh ketidakpahaman tukang dalam membangun rumah tembok. saat ini sedang dicoba memberi pemahaman rumah tahan gempa. Harusnya para tukang perlu regulasi sertifikat untuk para tukang sehingga dapat membangun rumah yang tahan gempa.

Untuk Rizalul Akbar : Peta Mikro diperlukan untuk membangun kawasan secara spesifik.

Pak Firdaus: Terkait payung hukum, di Sulsel baru 10 kabupaten yang mempunyai BPBD. Ke depan, diharapkan badan ini dapat lebih berkontribusi dalam upaya PRB.

Dr. Nishi: Terima kasih banyak untuk Bapak Muzakir. Informasi dari mana saja dapat dimasukkan dalam peta tersebut, selama mempunyai lokasi info dan beritanya dapat dipertanggungjawabkan.

Kuliah 6&7: Penanggulangan Bencana Alam di Asia

Presentasi 1: Penggunaan dan Pembacaan Imej Satelit

Pembicara: Dr. Keisuke Hoshikawa, CIAS, Kyoto University

Inti presentasi adalah bagaimana cara gambar satelit dapat digunakan.

Lihat presentasi. Dr. Hoshikawa menjelaskan bagaimana pemanfaatan peta satelit dalam upaya mitigasi dan rehabilitasi bencana.

Presentasi 2: Terjemahan Mesin dan Sambungan Kamus: Alat Multi-Bahasa dalam Penanggulangan Bencana

Pembicara: Mr. Julien Bourdon, CIAS, Kyoto University

Mr. Bourdon memaparkan apakah dibutuhkan mesin penterjemah terkait dengan manajemen kebencanaan. Ketika bencana terjadi di suatu kawasan dan masyarakat setempat tidak dapat berkomunikasi dengan para relawan yang datang.

Mesin penterjemah yang sudah lazim digunakan adalah Google-translate, dengan memasukkan kata perkata sehingga tersusun sebuah kalimat hasil terjemahan.

Penyusunan mesin penterjemah ini dimulai dalam proyek Disaster News Translation Project, dengan tujuan utama membuat kamus penterjemah terhadap artikel Jepang ke dalam bahasa Inggris dan Cina. Proyek ini dikerjakan dalam 10 hari, 15 tenaga ahli dan diperbantukan oleh 60 mahasiswa/i. Dictionary Cooperation yang diciptakannya masih lemah dengan nama tempat.

Dr. Bourdon menjelaskan sistem mesin penterjemah yang telah dibangun. Lihat slide presentasi.

Tujuan utama dibuatnya kamus penterjemah ini adalah untuk dapat menyampaikan berita ke dalam berbagai bahasa.

Jika masih ada yang belum tersampaikan ke email: julien@cias.kyoto-u.ac.jp

Presentasi 3: Kerjasama antara Jepang dan Aceh dalam Bidang GIS dan RS

Pembicara: Dr. Muzailin Affan, Ketua, Pusat Pengembangan GIS dan Remote Sensing, Universitas Syiah Kuala

Mengucapkan terima kasih banyak atas kerja sama dengan Jepang saat ini. Sangat banyak pembelajaran yang dapat diambil dalam kerja sama tersebut, di samping masih sangat ingin untuk terus melakukan peningkatan kapasitas ke depannya.

Setelah bencana, sangat banyak bantuan yang diberikan oleh Jepang kepada Aceh, besok akan ada kunjungan ke Aceh dari Jepang, terkait dengan pengembangan pengetahuan kebencanaan.

Dikarenakan waktu yang sangat terbatas, saya mengucapkan banyak terima kasih atas kerja sama yang telah terbina.

Presentasi 4: Program Bantuan sebagai Medan Komunikasi

Pembicara: Dr. Eriko Kameyama, Nara Prefectural University

Pengalaman bekerja selama 2 tahun dalam masa recovery di Aceh (5 kawasan pesisir di Aceh) dalam program penanaman bakau dan sosialisasi kepada masyarakat.

Penanaman bakau ditujukan untuk mengurangi risiko bencana.

Di Aceh Utara menanam mangrove bukan untuk mitigasi bencana tapi lebih kepada budidaya ikan. Makna penanaman bakau berbeda di antara lembaga pelaksana program dan masyarakat setempat. Jangan mencoba merivisi makna mereka, namun mendampingi adalah lebih tepatnya.

Presentasi 5: Gempa dan Tsunami Jepang 11 Maret dan Teknologi Informasi

Pembicara: Norio Maki, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

Menjelaskan bagaimana tsunami di Jepang terjadi, dan menampilkan video kejadian tsunami di sekitar pelabuhan di salah satu pantai di Jepang.

Di Jepang, sistem Peringatan Dini Tsunami-nya belum berjalan dengan sempurna.

Peran Media Sosial:

Berbagai media menampilkan berbagai informasi terkait dengan informasi kebencanaan baik dalam website maupun media lainnya.

Presentasi 6: 4 Solusi bagi Pengelolaan Informasi pada masa Bencana Alam

Pembicara: Mr. Shigeaki Ishii, President, Turning Point Co.Ltd, Tokyo

Ada 4 solusi yang sedang digunakan oleh perusahaan swasta di Jepang:

1. kamera digital berfungsi sebagai GPS
2. foto panorama dengan menggunakan lensa-mata-ikan
3. kamera dengan gambar 3600
4. Penggunaan smartphone sebagai alat bantu di lapangan

Memperkenalkan kamera bermerk “Ricoh” yang sudah dilengkapi dengan GPS. kemudian memperlihatkan kamera berlensa-mataikan, yang dapat menangkap gambar secara lebih luas. Selanjutnya, memperlihatkan cara pengambilan foto di lapangan dengan kamera lensa 3600, yang juga dapat digunakan dalam dunia medis. Penggunaan smartphones sangat mendukung dalam pengumpulan data, termasuk dalam pengambilan gambar di lapangan.

TANYA JAWAB

Erawati, BPS: Kepada Keisuke Hoshikawa, Software apa yang digunakan dalam melakukan pembuatan peta satelit tersebut?

Untuk Bapak Muzailin, Program apasaja yang dilakukan oleh Pusat GIS Unsyiah?

Tridani Rahman (BMKG): Dr. Hoshikawa Keisuke, mengacu kepada presentasi tadi ada getaran gempa, darimana kita dapat melihat mekanisme gempa tersebut? Ada gambar berupa monokrom, dijadikan RGB dst, bagaimana jika Dr. Keisuke memberikan sedikit pelatihan mengenai hal tersebut.

Rahmad Rizki Fadli, mahasiswa/i FKIP Kimia Unsyiah: Apakah satelit dapat digunakan untuk mengetahui peta sebaran debu misalnya?

Dr. Yamamoto: Untuk Pak Bourdon, seberapa banyak kata-kata yang dimasukkan agar terjemahan dapat berjalan, dan berapa hari yang diperlakukan dalam menginput kata-kata tersebut?

Untuk Maki, Jika muncul berita yang luar biasa dalam surat kabar mengenai berita...

Untuk Kameyama, Perubahan yang lebih baik itu dari siapa?

Dr. Hoshikawa Keisuke: Landsat gratis, kalau ALOS bebayar...

Ada alat khusus yang dilengkapi untuk menangkap getaran gempa tersebut.

Dr. Muzailin Affan: Bahwa Pusat GIS telah banyak melakukan training seperti di Bappeda Kota Banda Aceh dan Provinsi, dan NGO. Training dapat dilakukan di tempat kami atau di tempat lain yang ditentukan. Lokasi kantor kami di lantai 3 Lab. Terpadu Unsyiah.

Mengenai software, yang paling bagus adalah ERDAS-imagine, bisa juga digunakan software lain. untuk pengolahan data dapat digunakan Multi-SPEC??, namun kapasitasnya sangat terbatas.

Peta satelit ini dapat dibeli, di Jakarta ada banyak perwakilan, dapat menghubungi kantor kami juga, atau dapat juga menghubungi LAPAN, dengan biaya yang beragam.

Informasi selengkapnya dapat berkunjung ke kantor kami.

Bourdon: Untuk bencana Jepang kemarin, 500 kata sudah bagus. Ada juga 5000 istilah baru dapat berfungsi dengan bagus.

Dr. Maki: Sistem itu berjalan secara otomatis, memantau perkembangan berita pada surat kabar. karena ada operator yang memantau hal tersebut.

Dr. Kameyama: Perubahan yang lebih baik itu dari siapa? belum ada jawaban yang bisa meyakinkan diri juga. Program yang dibuat akan membawa perubahan kepada yang punya program juga. Yang penting adalah program yang dilakukan tersebut dapat dipikirkan bersama-sama untuk ke arah yang lebih baik. Perubahan yang bagaimanapun yang terjadi, diperlukan adanya tindak lanjut untuk mengetahui hal tersebut.

Kuliah 8: Pendidikan Siaga Bencana di Sekolah

Presentasi 1: Belajar Menyampaikan Materi Kesadaran Publik Terhadap Bencana Alam Pembicara: Munasri, LIPI

Ucapan salam kepada para hadirin dan terimakasih kepada TDMRC dan CIAS,.

Besarnya Indonesia dapat dilihat dari lagu dari sabang sampai meureuke (yang kemudian dinyanyikan bersama sama oleh peserta), kemudian menggambarkan betapa luasnya Indonesia dengan banyak pulau dan lautnya, penduduknya, beragam suku bangsa dan dialek, dan Indonesia juga negeri yang indah dengan sebutan dengan negara zamrud katulistiwa dengan pemandangan panorama dan gunung api. Kita menjadi lengah, dan lupa bahwa sebenarnya Indonesia juga ada bencananya dan sebagai supermarketnya bencana.

Sejak tahun 2004 sampai 2010 ada 14 bencana besar di Indonesia. Pengamatan bumi dari masa ke masa. Juga terdapat legenda-legenda misalnya dari india bahwa bumi itu gajah, ada ular yang jika bergerak-gerak akan terjadi gempa. Harus disampaikan kepada anak-anak tentang bumi itu apa, dan bagian bagian kulit bumi, dan di dalam kulit bumi terdapat lempeng yang terapung di atas cairan panas dan plastis, dan lempeng ini bergerak dan berjalaran yang digerakkan oleh Allah SWT, tetapi kita diberikan pikiran untuk untuk mencari, bahwa pergerakan lempeng bumi membentuk gunung api dan bisa menyebabkan gempa, dan pertemuan 3 lempeng indoaustralia, pasifik dan eurasia yang mengelilingi kepulauan Indonesia.

Dari hasil pergerakan lempeng di Indonesia menyebabkan terbentuknya 400 gunung api di Indonesia, dan potensi gempa bumi pada posisi yang sama. Di Kalimantan tidak ada gunung api, mengapa Tuhan menciptakan begitu, kita harus mencari dengan ilmu tektonik lempeng dan ini mulai dipelajari oleh S2 Kebencanaan Unsyiah.

Tiga pelajaran gempa bumi dan tsunami

1. Gempa bumi bisa terjadi kapan saja dan dimana saja pada jalur gempanya : paling banyak pada lempeng pasifik, tempat dimana potensi gempa kita sudah tahu tetapi waktunya kita tidak tahu misalnya di Jepang tentang kapan dan dimana gempa Tahoku akan terjadi, tetapi ternyata gempa terjadi pada 11 Martet 2011 dan terjadi di Timur Sendai, maka kita harus lakukan kewaspadaan dan kesiapsiagaan. Kenapa peneliti punya alasan kuat setiap 100 tahun ada gempa, tetapi di daerah Tokai belum muncul, semua peneliti berkonstrasi ke Tokai, tetapi tiba-tiba munculnya di Sendai. Di Indonesia sekarang sedang terpusat penelitian di Mentawai kapan akan muncul lagi. Kemudian 12 September 2007 terjadi gempa yang mengguncang Bengkulu, dan ada gempa lagi di mentawai. Melihat gambar ini kita akan berpikir aka ada gempa lagi dan dimana akan terjadi? Satu hal yang tidak kita ketahui waktunya kapan. Dan sekali lagi kesiapsiagaan yang harus di lakukan.
2. Bukan berupa skala Richter tetapi berapa besar guncangannya : Mahasiswa S2 Kebencanaan

belajar tentang ini, antara magnitude dan Intensity. Disimulasikan kalau kita berdiri dibawah lampu 100 watt, sinar lampu sebagai magnitudenya, kalau saya dibawah lampu terkena sinar akan terang, tetapi kalau saya bergeser akan gelap, begitu juga dengan gempa, makin jauh dengan pusat gempanya maka kerusakannya semakin kecil, jadi gempa dangkal menyebabkan kehancuran yang lebih parah. Di Jepang dipakai skala Shindo 1-10. Misalnya skala enam indikatornya cerobong runtuh, tetapi di Indonesia tidak ada cerobongnya. Jadi yang harus diperhatikan guncangannya.

3. Gempa yang pelan pun dapat menimbulkan tsunami : kita bisa lihat 1994 di Banyuwangi gempa nya kecil tetapi menimbulkan kerusakan.

Lesson learn dari goyangan yang gemulai di mentawai tapi menghasilkan tsunami, bersama JICA project menjumpai para saksi hidup, salah satunya Salomon Saogo (37thn) pekerjaannya sebagai penambang kayu, pada 2010 saat terjadi gempa mentawai, dia bersama dua orang rekannya sedang menebang kayu, sore itu langitnya mendung dan ada hujan dan muncul geloro (ombak), rencananya mereka akan mencari angkaw (kepiting) karena hujan mereka tidak mencari kepiting dan duduk saja di pondok, dan tiba-tiba pondoknya bergoyang goyang dan air dalam gelas juga bergoyang, karena sebelumnya Salomon sudah mendapatkan info kalau gempa air laut surut dan merekapun kelaut, sampai disana airnya tidak surut, tetapi ombak yang besar tiba-tiba berhenti. Kemudian mereka lihat tsunami datang dan mereka lari dan Pak salomon yang mendapatkan info kalau gempa lihat ke laut dan saat gelombang besat datang kemudian dia menyelamatkan diri naik pohon, dua orang temannya lari ke hutan walaupun sudah diperingatkan okelh Pak salomon bahwa pulau nya kecil dan air akan masuk ke pulau, tetapi mereka tidak percaya dan tetap masuk ke hutan, berita buruknya sampai saat ini temannya hilang dan pak salomon selamat karena dia naik pohon.

Lagu GEMPA

Kalau Gempa Lindungi Kepala by NAIF

Kalau ada gempa lindungi kepala

Kalau ada gempa ngumpet dikolong meja

Kalau ada gempa hindari dari kaca

Kalau ada gempa lari ke lapangan terbuka

(toret toret tet HOY)

Indonesia rawan bencana ayo kita siaga

Presentasi 2: Pembelajaran Animasi untuk Mengetahui Bencana dan Upaya Pengurangan Risikonya sedini Mungkin Bagi Anak-Anak

Pembicara: Mahruza Murdani, TDMRC, Universitas Syiah Kuala

Film animasi ini dikembangkan oleh TIM Knowledge Manageman dari TDMRC dengan tujuan :

Mengajari anak anak apa itu bencana dan bagaimana mengurangi resiko bencana itu

Mendorong perilaku anak untuk siaga terhadap bencana

Mengukur tingkat kewaspadaan anak terhadap bencana

Menonton Film Siaga Bencana Gempa Bumi

Agama dan Inong

Agama: menjelaskan tentang Bumi dan bagian bagiannya : Inti Bumi dalam, Luar dan mantel bumi serta kerak bumi dengan ketebalan 6300 KM dan panasnya dapat menembus lapisan bumi dan pergerakannya menyebabkan arus konveksi yang menyebabkan pergerakan lempeng bumi yang saling menjauh, saling mendekat dan saling berpapasan. Lempeng eurasia dan indoaustralia menyebabkan terjadinya gempa yang sering kita rasakan di Aceh. Pergerakan lempeng dan cairan magma bumi juga dapat membentuk gunung api. Gempa yang disebabkan oleh pergerakan lempeng bumi disebut gempa tektonik dan gempa yang disebabkan gunung berapi disebut gempa vulkanik, jadi sekarang kita tahu mengapa Aceh Rawan Gempa?

Inong : menjelaskan apa yang harus kita lakukan, simpan nomor dan alamat penting seperti Kantor Polisi, BMKG dll, membangun rumah dan sekolah tahan gempa, membuat jalur evakuasi, pastikan tas siaga bencana dan selalu waspada dan siap siaga ketika bencana terjadi.

Apa yang harus dilakukan saat gempa: tetap tenang dan jangan panik, berlindung di bawah meja jauhi kaca, lindungi kepala dengan buku atau tas, jauhi tiang listrik, lampu dan pohon yang bisa tumbang, jika di gunung waspada adanya longsor, kalau di pantai lari ke tempat yang lebih tinggi dan menjauhi pantai.

Apa yang harus dilakukan jika gempa, terjadi di dalam ruangan, maka jangan berdesak-desakan untuk keluar dari ruangan, kalau di lift cari tangga darurat, dan tetap waspada dengan gempa susulan. Ingat gempa tidak bisa dicegah tapi bisa dikurangi resikonya.

Tahapan pembuatan film :

Riset Cerita yang merupakan kerangka besar dengan naskah dan pembentukan karakter tokoh kemudian voice recording (pengisian suara tokoh) dan mulai untuk membuat pembuatan animasi dilanjutkan review pasca produksi dan Final

Penyusunan naskah : siapa yang akan menjadi target film itu sendiri, pemilihan konten isi, dan dialog dalam tokoh kartun penggunaan bahasa yang sesuai target penonton dan finalisasi naskah.

Pemilihan Karakter Tokoh : yang dekat dengan target penonton berapa banyak tokoh yang akan ditampilkan dan tokoh tersebut harus sesuai dengan adat/peraturan setempat (seperti inong yang memakai jilbab)

Dari naskah mulai merekam dan dimasukkan ke dalam film animasi

Tahapan Visualisasi/animasi : menggambarkan tokoh dan membuat pergerakan tokohnya, dengan membuat gambar yang disusun dan digerakkan secara cepat, kemudian gabungkan suara dan gambar Presentasi lama waktu pembuatan Film : Drama memakan waktu pra produksi 70%, prod 20%, shooting 10 % . Kalau animasi pra produksi 20%, produksi 70% dan pasca produksi 10 %.

Diadakan sosialisasi film kepada anak-anak dengan program “animasi go to school” dengan film-film yang memikat anak sekolah dengan gampang dan mudah di tangkap oleh anak-anak. Pada hari Senin minggu ini, TDMRC mendapat kunjungan dari Fakultas Kedokteran, dan mereka juga mengatakan setelah mereka menonton animasi lebih cepat menangkap pesannya juga.

TANYA JAWAB

Julian: mengenai animasi, sekarang pengisian suara Agam pakai suara dewasa, apa tidak berubah karakternya?, kalau pakai suara anak bagaimana?

Mahruza: saran itu sudah pernah kami dapat sebagai masukan kami dan nanti kita coba sesuaikan karena karakter suara harus paham dulu tentang pengetahuan yang akan disampaikan kepada anak anak. Karakter suara yang dimunculkan sekarang memang kurang anak anak dan mungkin harus dilakukan pendekatan suara anak anak seperti apa dalam pembacaan naskahnya walaupun tetap di suarakan oleh orang dewasa.

Rahmi: Bagaimana kita bisa mendapatkan CD ini untuk kita berikan kepada anak

Mahruza: memang akan disitribusikan ke sekolah-sekolah dan bisa juga mendapatkan melalui TDMRC

Yamamoto: Bpk Nasri, sangat menarik, memang harus siaga sebelum terjadi bencana, sehubungan ini saya melihat ada kesiapan di Banda Aceh, seperti radio dan lapangan futsal, pada saat terjadi gempa bisa dimanfaatkan dan bisa menyiapkan masyarakat. Dan tadi dikatakan Indonesia sangat luas dan pola pikir berlainan, kalau bapak bagaimana cara bicara di daerah yang berlainan pada saat member materi? kalau ada triknya mohon informasinya.

Bpk Mahruza, animasi itu dibuat khusus untuk masyarakat Aceh apakah bisa dimanfaatkan oleh masyarakat lain karena di Aceh juga berbeda-beda suku, apakah animasi ini bisa dipakai untuk luar Banda Aceh atau apakah harus nmanambahkan sesuatu?

Munasri: pertanyaan ini mengingatkan saya bahwa lapangan terbuka (futsal) bisa menjadi evacuation point dan FM radio bisa juga dimanfaatkan pada saat bencana, harus ada pihak yang

menghubungi mereka terkait dengan hal ini. Di Jogja ada Desa Bale Rante, di sana terdapat radio masyarakat menggunakan radio HT, secara legal tidak boleh karena melanggar frekuensi, tetapi manfaatnya sangat maksimal untuk masyarakat. Dan ada repeater informal tetapi frekuensinya masih illegal. Apakah ini boleh dilanjutkan? Karena illegal. Tetapi idenya sangat baik, yang saya paparkan tadi pada tahap kesadaran belum kepada kesiapan siaga. Seperti saya kalau saya kemana saja saya membawa peluit. Kalau ada apa apa bisa ditiup peluitnya. Tentang penyesuaian dengan daerah, kalau saya mencoba menyesuaikan dulu dengan daerahnya apabila saya akan membawakan sesuatu .

Mahruza: Film yang ditampilkan tadi memang muatan kedaerahannya terletak pada tokohnya yang memakai jilbab, tetapi pada kontennya bisa dipakai oleh siapa saja.

Hendra: Pak munasri sangat bagus sekali dengan metodologi pemebrian materinya lebih fresh untuk penyampai maupun penerima, bagaimana caranya agar semangat untuk melakukan kreatifitas terus menerus ke level guru, yang sebenarnya merupakan simbiosis mutualisme dan saling menguntungkan, dan bagaimana guru memahani konsep bencana secara panggilan jiwa tanpa harus mengikuti seminar tarianing dan guru2 bisa lebih kreatif lagi. Apakah materi ini pernah disampaikan sebelumnya di guru-guru di Aceh?

Munasri: Sebenarnya Pak Hendra sudah menjawab sendiri, memang harus ada panggilan jiwa, saya mengusahakannya seperti ini, kalau saya harus selalu mengingat orang tua saya, istri saya, anak saya, keluarga saya dan orang-orang yang saya cintai sehingga dengan begitu kira-kira apa yang harus saya lakukan, dan sulit untuk mendiskripsikannya, saya mencoba untuk diri saya sendiri dulu, seperti siaga dengan barang-barang kesiapsiagaan dan saya membangun rumah saya menggunakan bambu yang di anyam, kemudian ada koridor kiri kanan sehingga bisa bikin jendela dan ada sirkulasi udara sehingga berkurang listrik, tidak pasang AC, Instalasi listriknya kelihatan pipa-pipanya diluar, ramah gempa dll, dan coba untuk diri sendiri baru enak untuk dikatakan atau disampaikan dan dicontoh oleh orang lain.

Yusniarni: saya guru dari Pulau Aceh, hari ini saat yang berharga buat saya dan maaf terlambat tidak mendengar lebih jelas dari Pak Munasri, saya sering naik boat atau naik kapal karena tinggal di Pulau Aceh. Kalau gempa di laut, apakah kita tahu saat itu sedang terjadi gempa dan apa langkah yang harus dilakukan.

Munasri: kalau saya dalam keadaan seperti ibu kita harus memakai pelampung, seperti di pandangan kalau mau melihat pemandangan disekitar laut dan menggunakan perahu, ada pelampungnya. Kalau secara teori, tsunami di laut pergerakannya cepat tapi tingginya hanya setengah meter, maka paculah perahu ketengah lautan agar terhindar dari ombak besar. Kita coba explore diri sendiri karena tidak semua mengalami dan pastikan juga bu bahwa perahu yang dinaiki dalam kondisi baik.

Adelila: saya terkagum kagum dengan komik dan kartun yang sudah diciptakan oleh tim TDMRC, saat ini UI membuat forum yang menampung tulisan anak anak dan menampilkannya dengan bentuk mading tapi dicetak seperti spanduk. Kaitan dengan program ini kan kerjasama dengan CIAS, bagaimana kalau membentuk grup, untuk anak sekolah yang anak anaknya tertarik untuk menulis dan kita membina anak anak menulis cerita kebencanaan dan di film kan, kita bisa memilih karakter orang Indonesia dan Jepang. LIPI membuat komiknya dan TDMRC membuat filmnya. Karena kebetulan banyak yang datang dari Sekolah Siaga Bencana pada hari ini.

Munasri: Idenya setuju, kalau ada yang mengkoordinir itu saya sangat setuju, kita coba merealisasikan supaya lebih hasilnya bisa terlihat/terwujud.

Sesi Penutup

Presentasi 1: Aplikasi dan Masa Depan Area Informatics

Pembicara: Prof. Shoichiro Hara, CIAS, Kyoto University

Saya akan menjelaskan tentang Area Studi CIAS. Seperti diketahui ada gempa besar besaran di Jepang, gempa ini sudah terjadi dari 1300 tahun lalu dan tercatat dalam sejarah dan kami sudah melakukan penelitian di lapangan berdasarkan dokumen sejarah ini, dulu di Sendai sebelumnya sudah sering terjadi gempa besar, sehingga kami sangat menyesal, padahal infonya sudah ada tetapi tidak disebarkan dan tidak cukup waktu untuk menyebarkan informasinya, maka dari itu kami membina suatu system informasi, salah satunya kami menyimpan catatan-catatan bersejarah, dengan itulah kami berusaha untuk mengetahui apa yang sedang terjadi, namun walaupun info sudah ada kalau tidak dimanfaatkan tidak ada artinya, jadi perlu tahu bagaimana memanfaatkannya juga, disini kami akan memperkenalkan bagaimana kami akan menggunakan data-data itu. Kalau di Jepang info banyak sekali tercatat sejak beratus ratus tahun sudah ada dan tersimpam dalam buku, tetapi kalau buku harus di baca kalau database bisa terbuka untuk umum, gambar ini salah satu yang sudah di masukan dalam database dan seperti inilah hasil data basenya, Ini catatan sejarah yang sudah terjadi 1300 tahun yang lalu yang sudah tertulis, karena jepang banyak catatan-catatan bersejarah tentang gempa jadi kami bisa memprediksi kapan lagi akan terjadi gempa, jadi info itu sangat penting untuk mengetahui tentang gempa dan tsunami di Jepang, sekarang di masa global ada banyak teknologi untuk membina database seperti ini. Seperti perpustakaan di website tetapi harus buka dulu bukunya. Kalau sistem ini sudah bisa langsung terbuka halamanya. Di dalam ini kami bisa lihat info gempa tentang waktu, tempat dan besarnya, dalam system yang dikembangkan CIAS sangat perlu info nama tempat, jadi info kerusakan bisa dijadikan daftar sesuai tempat terjadinya. Gambar ini salah satu tampilannya, titik merah ukuran gempanya besar dan garis-garis adalah lokasi lempeng bumi, jadi kami menggabungkan dari catatan bersejarah itu kami biasa mengetahui kapan rentang akan terjadi gempa di masa datang, jadi kami bisa melakukan upaya Pengurangan Risiko Bencana. Bagaimana menggempurkan informasi yang bisa dimanfaatkan. Di dunia banyak website yang bisa di akses, jadi kalau sudah dapat info tadi bisa tahu lebih detil dimana pusat gempa dan berapa besarnya gempa. Ini salah satu database yang dimanfaatkan dalam website. Kami yang disusun secara teratur sesuai dengan waktunya. Jadi setiap hari bisa diketahui misalnya berapa besarnya angin kencang dan kita bisa melihat kapan terjadi angin kencang lagi. Ini bisa digabungkan dengan catatan sejarah, dicari pada tanggal itu pernah terjadi terjadi apa saja. Dan ada banyak info didunia anyg bisa dimanfaatkan dan bisa di aplikasikan untuk Aceh juga.

Pesentasi 2: Aceh sebagai Serambi Dunia

Pembicara: Dr. Yoshimi Nishi, CIAS, Kyoto University

Walaupun pemaparan saya memakai teknologi yang saya datangkan dari Jepang tetapi karena saya pernah tinggal di Beurawe banda Aceh selama 3 tahun, maka saya ingin menggambarkan Aceh di masa depan. Dulu Aceh disebut sebagai serambi mekah karena ada budaya yang di dapat dari ulama arab yang melakukan perdagangan di Aceh, dan diterjemahkan dalam bahasa melayu dan masuk juga budaya dari Cina, Eropa dan Hindia sehingga terlahirlah nama ACEH.

Di tanah rencong ini ilmu pengetahuan dan pengalaman yang datang dari seluruh dunia terkumpul. Dan sesuai dengan kesepahaman daerah, kalau di daerah Aceh ini adalah arena pertukaran info. Mengapa Aceh selama ini berkembang di dunia bukan hanya karena lading hasil bumi dan emas atau sumber daya alam tetapi karena kalau orang datang ke Aceh dapat memperoleh ilmu pengetahuan yang mudah di dimanfaatkan oleh masing masing pihak.

Media info berubah seiring jaman, kalau dulu ada ulama yang menyampaikan informasi, pada masa perang ada pesawat radio dan pesawat terbang untuk membawa misi. Kalau informasi Aceh hanya di serambi saja tidak bisa memanfaatkan dan membawa informasi itu kepada dunia, prinsipnya:

1. Harus ada kemampuan, bagaimana bisa membawakan informasi tersebut

2. Aplikasi memanfaatkan informasi sesuai kebutuhan masing masing
3. Hasil pengetahuan sendiri harus dipahami oleh masyarakat lain seperti kearifan lokal harus dipahami oleh masyarakat luar. Dan masyarakat Aceh harus menterjemahkan sendiri kearifan lokal tersebut agar bisa dipahami masyarakat luar.

Apa bapak ibu yakin bisa membina informasi ini? (jawaban peserta: YAKIN)

Tentang workshop ini, hari ini adalah hari terakhir dari workshop yang berjudul warisan bencana untuk meningkatkan ekonomi dari segi area informatics, yang kami lakukan membuka jalan baru untuk menggabungkan pengalaman di Aceh dan pengalaman yang sudah tercipta di dunia. Misalnya menggunakan internet dengan membina Pelayanan Pemetaan Informasi Kebencanaan dan Sosial Aceh. Saya harap bisa jadi jembatan antara Aceh dan dunia. Sekarang harus berpikir tentang tanggung jawab masing-masing, misalnya kepada ibu guru harus mengajar anak-anak, jadikan pembawa ilmu dengan membagi ilmu dan pengalaman, untuk mampu menarik hati orang, kalau Aceh terjadi konflik seperti dulu lagi, orang luar tidak mau datang. Maka masyarakat harus menjaga agar tidak terjadi konflik lagi, Kalau terjadi konflik kecil-kecil kita bisa selesaikan dengan cara dan pendekatan masing-masing. Maka masing-masing orang punya tanggung jawab sebagai pembawa ilmu dan pembawa damai.

Terimakasih.

TANYA JAWAB

Yamamoto: Saya ingin bertanya pada Prof. Hara cara menyimpan catatan-catatan sejarah, cara terbaik untuk menyusun dan menyimpan data-data tersebut, termasuk kegiatan kita ini bisa kita simpan dan dimanfaatkan untuk Pengurangan Risiko Bencana

Hara: Untuk membina upaya Pengurangan Risiko Bencana dalam Area Informatic perlu diperhatikan pencatatan prosesnya bukan hanya dicatat hasil dan tujuan saja, proses sebelum memperoleh hasilnya, diskusinya bagaimana dan itu sangat penting karena pengalaman setiap orang berbeda dan tidak bisa diterjemahkan, misalnya ada sekolah yang bisa menyelamatkan murid dengan lagu kebencanaan, tetapi mungkin di sekolah lain tidak bisa hanya menggunakan lagu saja karena berbeda latar belakang.

Dedy (BMKG): Bagaimana Jepang membangun budaya disiplin sehingga masyarakatnya siaga bencana dan berapa lama membangunnya? Sejauh mana teknologi yang sudah dikembangkan di Jepang untuk mengetahui gempa yang akan terjadi?

Nishi: penelitian tentang gempa ada tahapannya misal gempa yang terjadi selama kurun waktu 30 tahunan, bisa diprediksi akan terjadi tetapi tidak bisa prediksi waktu dan jam nya, maka harus siaga sebelum terjadi bencana, walaupun sudah canggih teknologinya.

Hara: agak susah dijawab tentang budaya Jepang, tetapi ada budaya pertanian di Jepang yang harus gotong royong seperti pertanian dan pengalaman masa perang dunia II, edangkan budaya tertib itu berbeda setiap daerah, maka tidak usah diambil pusing tentang budaya itu, tetapi setiap daerah akan mencari sendiri budaya tertib yang cocok untuk daerah masing masing.

Hendra: saya tertarik dengan pemaparan kearifan lokal terkait dengan Pengurangan Risiko Bencana, kebetulan saya sedang melakukan pengkajian tentang kearifan lokal di 23 Kabupaten untuk Pengurangan Risiko Bencana, pada saat tsunami 2004 di Siemelu sedikit korban karena budaya smong yang baru diketahui masyarakat luas pasca tsunami, saya sudah menyelesaikan draft final dari penelitian tersebut, yang ingin saya tanyakan adalah apakah dalam area studies bisa mengambil peranan budaya lokal dalam Pengurangan Risiko Bencana, mungkin di Jepang ada budaya yang digunakan dalam template area studies dan saya berharap itu bisa digunakan di Aceh.

Nishi: Area studies dapat memanfaatkan Kearifan Lokal tetapi harus menterjemahkan dulu dan itulah yang sekarang sedang kami bina dan lakukan.

Penutupan

Prof. Shoichiro Hara
CIAS, Kyoto University

Saya ingin mengucapkan terimakasih kepada bapak ibu sekalian

Seperti diketahui pada tanggal 11 Maret 2011, Jepang mengalami gempa an tsunami yang cukup besar, disitu kami terasa ada keadaan diluar dugaan kami, sebelum terjadi bencana kami sebetulnya sudah ada info akan terjadinya bencana itu, info sudah ada namun berada di tempat masing-masing dan tidak terkumpul.

Saya pikir ini merupakan bencana informasi juga. Bisa dikatakan bencana informasi karena merupakan kegalalan dalam memiliki ilmu pengetahuan bersama, kalau ada ilmu pengetahuan bersama, mungkin kerusakan dan Korban jiwa bisa berkurang dan kami juga melihat fungsi internet sangat besar.

Dan dengan adanya kegiatan ini kami menyadari bahwa di Indonesia juga banyak upaya untuk Pengurangan Risiko Bencana dengan teknologi informasi, kami sangat kagum dan terkesan sekali.

Fungsi dari data base ada 3; 1)Disimpan dan diwariskan, 2)Membagikan ilmunya, dan 3) Memanfaatkan ilmunya. Kami harus menyadari niatnya (untuk mengumpulkan semua informasi) sudah ada tetapi hasilnya belum didapat, tetapi kita dapat tuntaskan tantangan ini.

Untuk mengatasinya CIAS Kyoto sudah melakukan upaya menggabungkan 2 ilmu pengetahuan yaitu area studies dan informatika, utk memanfaatkan ilmu pengetahuan area informatic harus ada kerja sama dari masing-masing pihak,

Dalam kesempatan ini kami dari CIAS mengajak bapak ibu untuk bekerja sama dalam mengembangkan ilmu dan membagi pengalaman masing-masing supaya dapat dimanfaatkan masing-masing pihak, untuk tujuan tersebut kami menggunakan bahasa Jepang dan Indonesia, itu pasti ada manfaatnya untuk pertukaran informasi dan saya sangat berterimakasih kepada pihak yang sudah menjadi penyelenggara.

Terakhir saya berharap hasil dari symposium dan workshop ini menjadi tahap awal untuk melanjutkan kerjasama dan melanjutkan penelitiannya di masa depan.

Penutupan

Dr. Muhammad Dirhamsyah

TDMRC, Universitas Syiah Kuala

Assalamualaikum wr wb,

Sejak 3 hari lalu kita sudah mengadakan symposium yang dimulai di Hotel Hermes, kemudian di museum tsunami dilanjutkan di gedung hyogo prefecture dan sekarang di TDMRC. Saat ini kita sudah mendapatkan MoU dengan CIAS dan memang begitulah Aceh, sesuai namanya Arab, Cina, Eropah dan Hindia sehingga menjadi ACEH, sehingga berubah menjadi NAD dan menjadi ACEH lagi,

Kita dengan Jepang sudah melakukan kegiatan bersama dan alhamdulillah sekarang sudah melakukan kegiatan yang kreatif. Jadi persahabatan kita sudah berjalan sejak dulu dan munculah kegiatan symposium dan workshop ini.

Kelemahan kita sebenarnya adalah paling susah untuk menulis, karena tulisan itulah yang menghasilkan sejarah, seperti Pak Munasri tadi yang sudah menjelaskan tentang gempa seismik, bagian-bagian bumi, itu juga merupakan hasil dari tulisan. Jangan biarkan info yang kita punya ini hanya disimpan di kepala kita sendiri tanpa mewariskan kepada generasi selanjutnya. Kita harus sadari bahwa sebenarnya ibu anak dan guru adalah kunci dari penyebaran informasi kebencanaan dan bagaimana ini bisa diteruskan kepada generasi yang akan datang.

Kami dari Universitas (akademik) hanya bisa menyelenggarakan, itupun kadang tidak bisa langsung dimengerti oleh masyarakat karena sulit untuk menterjemahkannya kedalam bahasa yang lebih sederhana lagi, mari kita sama-sama duduk, kepada ibu-ibu yang ada disini dan terimakasih kepada pihak Jepang terutama CIAS yang sudah meluangkan waktu untuk duduk disini bersana kita dengan segala pengorban waktu serta biaya dan itulah hasil dari persahabatan yang sudah terjalin selama ini. Mari kita sama-sama menyiapkan dan mengalokasikan waktu kita untuk menggali bersama agar informasi yang kita punya bisa bermanfaat bagi masyarakat dunia.

Kami beberapa hari lalu ke Gedung Arsip, ternyata data yang ada belum dikeluarkan dan belum dimanfaatkan dengan baik, tugas kita adalah untuk bisa menterjemahkan informasi kedalam bahasa sehari hari yang ada di sekeliling kita, kalau dilihat kondisi sekarang, berkembang café yang punya wifi, dan banyak anak-anak yang bermain game online disana. Mari kita bisa kreatif lagi memanfaatkan kondisi tersebut dengan membuat game kartun online tentang Pengurangan Risiko Bencana dan ini bisa kita gunakan kedepan sebagai bagian dari upaya kesiapsiagaan dan penyebaran informasi kebencanaan.

Akhirnya itulah yang bisa kita terjemahkan kedalam bahasa sederhana dan semoga upaya itu bisa dimanfaatkan juga oleh masyarakat dunia.

Assalamualaikum wr wb.

Profil Narasumber dari Jepang

Dr H SHI kio

Profesor / Direktur, Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University. Dr. Hayashi aktif memfokuskan penelitian pada daratan Asia Tenggara, terutama pada Thailand dan Laos dengan tema dinamisme sosial dan agama di kawasan Teravada Buddhis. Dr. Hayashi membuat penelitian di Thailand sejak 1981, dan di Laos, Kambojia dan Yunnan Cina sejak 1990-an dengan tema agama praktek dan hubungan antara bangsa. Sejak 2006. Dr. Hayashi juga mulai berupaya untuk membangun sistem pemetaan untuk imam Buddha dan Vihara/kelenteng yang bergerak.



Dr IS W Masayuki

Profesor Madya, Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University. Ahli bidang studi pertanian/agraria. Wilayah penelitian adalah Asia Tenggara terutama Vietnam dan Indonesia. Terkadang mengunjungi perhutanan di Afrika dan Amazon untuk studi banding. Ia memfokuskan penelitian pada mekanisme perubahan penggunaan tanah dan evaluasi pengaruh usaha manusia terhadap lingkungan hidup.



Dr M M T Hiroyuki

Profesor Madya di Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University. Ahli bidang sejarah Malaysia dan Asia Tenggara dan bidang informasi dalam penanggulangan bencana. Dr. Yamamoto mendapatkan gelar Ph.D. di bidang Area Studies dari University of Tokyo (2003). Dr. Yamamoto pernah menjadi konsultan di Konsulat Jenderal Jepang di Medan (2003-2004). Kini Dr. Yamamoto menjadi ketua proyek riset berjudul "Area Studies dan Penanggulangan Bencana: Model Sumatera dalam Upaya Penanggulangan Bencana" (2011-2014). Hasil penelitian Dr. Yamamoto termasuk Bangsa and Umma: Development of People-Grouping Concepts in Islamized Southeast Asia. (Kyoto University Press, 2011 dan Film in Contemporary Southeast Asia : Cultural Interpretation and Social Intervention (Routledge, 2011).



Mr TER D Masahiro

Lahir di Kobe, Jepang pada tahun 1971. Setelah gelar master dalam bidang Sejarah Pra-modern Jepang dari Osaka University, Mr. Terada bekerja di Museum Sejarah Nasional Jepang dan pernah menjadi anggota Komite Pewarisan Bahan Sejarah Perjuangan Bandara Narita. Mr. Terada aktif melakukan penelitian tentang pameran museum yang mengumpulkan kenan-kenangan insiden "negatif" seperti bencana alam dan perang. Mr. Terada bersama menulis buku "Kunjunglah Museum/Memorial untuk Belajar Perang" (sebuah buku panduan demi generasi muda untuk belajar Perang Dunia Kedua di Asia, Penerbit Iwanami, Tokyo, 2006), dan "Metodologi Representasi Memori" (Penerbit Showado, Kyoto, 2009).



Dr H M M T Satoko

Asosiasi Riset di Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University. Ahli bidang antropologi dan Area Studies di Asia Tenggara. Setelah gelar sarjana dari Department of International Relations, Ritsumeikan University pada 1992, Dr. Hamamoto mendapatkan gelar dokter dalam bidang Humanity and Environmental Studies di Kyoto University pada 2004.



Dr H R Shoichiro

Profesor di Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University. Dr. Hara aktif melakukan penelitian dalam upaya mengembangkan bidang Area Informatics dan membangun sistem penyatuan dan pembagian berbagai data dan info dengan menggunakan informasi geografis. Setelah gelar Ph.D. (Medical Science), Dr. Hara pernah menjadi asosiasi penelitian di Department of Medical Science (Doctor Course), University of Tokyo pada 1989. Dr. Hara pernah menjadi asosiasi riset di National Center for Science Information Systems (NACSIS) dan profesor madya di National Institute of Japanese Literature (NIJL).



Dr ISHI oshimi

Profesor Madya di Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University. Ahli bidang sejarah Indonesia, terutama Aceh dengan fokus penelitian tentang penanggulangan sosial terhadap bencana alam dan konflik. Gelar Ph.D (Area Studies) dari University of Tokyo pada 2007. Dr. Nishi pernah menjadi mahasiswa tamu di FKIP sejarah, Universitas Syiah Kuala (1997-2000). Dr. Nishi sedang melakukan program "Menulis Sejarah Pribadi dengan Mesin Ketik" di Banda Aceh, dan juga melakukan penelitian tentang sekolah Indonesia di Malaysia untuk mempertimbangkan imigran Indonesia di kawasan Asia Tenggara.



Dr H TT RI Mina

Profesor Madya di Anthropology of Education Department of Educational Sciences, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University. Dr. Hattori lahir di Aichi, Jepang. Dr. Hattori aktif melakukan penelitian dalam bidang pendidikan Indonesia, terutama tentang sejarah pendidikan Islam di Sumatera Barat, reformasi pendidikan, dan gender. Setelah sarjana pendidikan di Nagoya University, Dr. Hattori mendapatkan gelar Ph.D. di bidang studi pendidikan dari Nagoya University pada 1999. Dr. Hattori menulis beberapa buku seperti “Pendidikan Perempuan Modern di Indonesia: Perempuan dalam pergerakan reformasi Islam” (Penerbit Keiso, 2001), “Perkembangan Pendidikan Islam di Indonesia” (Toyo University, 2007), “Bantuan Internasional terhadap Pendidikan Dasar di Negara yang sedang Berkembang” (Gakubundo, 2008).



Dr H SHI W eis ke

Asisten Profesor, Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University. Dr. Hoshikawa aktif melakukan penelitian mengenai kawasan Asia Tenggara, terutama Thailand dan Indonesia. Fokus penelitiannya adalah upaya-upaya masyarakat lokal untuk beradaptasi dengan lingkungan hidup tempatan dan perubahan sosial dan ekonomi. Selain perubahan sosial di kawasan pedesaan pertanian dan agraria, Dr. Hoshikawa berminat juga penanggulangan masyarakat terhadap bencana alam sebagai suatu proses dimana masyarakat menyesuaikan diri dengan keadaan baru.



Mr Julien Bourdon Miyamoto

Asisten Bidang Akademik di Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University. Mr. Bourdon aktif melakukan penelitian tentang (1) koordinasi dan kerjasama antara masyarakat yang berbeda budaya, (2) pola lokalisasi di website multilinguistik. Mr. Julien menyelesaikan pendidikan S1 dalam bidang informatika di Université de Caen Basse-Normandie dan mendapatkan gelar master dalam bidang intelijen web di Université de Saint-Etienne. Pernah mengikuti pendidikan di Department of Informatics, University of Sheffield. Mr. Bourdon sedang mengikuti program S3 di Department of Social Informatics, Graduate School of Informatics, Kyoto University. Sejak tahun 2011, Mr. Bourdon bekerja untuk mengembangkan sistem database di CIAS, Kyoto University.



Ms ME M Eriko

Dosen Fakultas Regional Promotion, Nara Prefectural University, Jepang. Ms. Kameyama lahir di Osaka, Jepang pada tahun 1972. Setelah menyelesaikan program S2 di bidang studi bahasa dan budaya di Osaka University of Foreign Studies pada 1996, dan juga program S2 studi pembangunan di Institute of Social Studies pada 2006, Ms. Kameyama pernah bergabung dengan beberapa lembaga bantuan sebagai staf implementasi program pembangunan sosial di Timor-Leste dan Aceh, Indonesia.



Dr M I orio

Profesor Madya di Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University. Dr. Maki lahir di Kyoto, Jepang pada tahun 1968. Setelah gelar sarjana dalam bidang arsitektur dari Kyoto University pada 1991 dan gelar Ph.D. dalam bidang teknik dari Graduate School of Engineering, Kyoto University pada 1997, Dr. Maki pernah menjadi asisten profesor di Kyoto University. Dr. Maki aktif melakukan penelitian dalam bidang penanggulangan bencana alam dari segi keahlian engineering. Hasil karyanya termasuk buku berjudul “Etnografi Penghunian di tengah Bencana Alam” (Penerbit Kashima, 2011), “Penanggulangan Risiko Organisasi: Bagaimana Menghadapi Risiko” (Maruzen, 2008), “Panduan Tata Ruang Kota untuk Pelajar” (Penerbit Ichigaya, 2008).

